

The BARRETTS of

by Rudolf Besier.

355
734

ルドルフ・ベジエール作
『ポルポットの街のバレット家』

— 五幕 —



始



特213
27

序

玉の萩花匂ふ秋が再び訪れて参りました。今年この昭和十年の秋、私共神戸女學院は星霜めぐつて茲に創立六十周年を迎へる事となりました。今更に吾等はこの學院の古い歴史を省み、隆盛なる現在を思ひ、更に向上の道へ進むを思ひ、本當に感謝の氣持で、充されて居ります。それで此の喜ばしき年を記念すべく、各組、各會それ〴〵が六十周年にささげし記念事業を致す事となりました。私共英語師範科三年生も色々考へました揚句、英文科として此の二年半餘りに學習しました英語を何かに於て表したらよからうと相談となり、此の翻譯となつた譯で御座います。原本は英國の作家ルドルフ・ベジニア作「ザ・バックス・ボウ・ウキンボール・スツリート」と申しますもので、この映畫化されしものが「白い蘭」と題して今夏、阪神地方に来て居りました。これは文學史上に有名なロマンティックな小説で、その妻エリザベスの傳記の一部とも言ふべきもので、其意味から言つても此の翻譯に興味を持たされた次第です。

各々分擔して致しました爲め、統一を缺く憾みがありますが、然し一冊の纏つたものを譯し上げた事は、譯解上色々勉強となるべき事もあり、無意義でなかつたと喜んで居ります。最後に色々御助力下さいました丹部先生に厚く感謝致します。尙ほ印刷の方で安東氏が犠牲的に便宜を計つて下さり、色々御盡力下さいました事を併せて深く感謝します。

昭和十年十月

神戸女學院
英語師範科三年一同



（幕二第）一面 對 初一



—ブラウニングとエリザベス—

……私達はほんの半時間しかお互に
話ませんでした。だのに藝術や、
人生や、死や、戀愛について親し
く語り合ひました……

特213
217

五幕喜劇

ウキンポール街のバレット家

「此の劇は一八四五年ロンドン、ウキンポール街五十番地
エリザベス・バレットの病室に於て演ぜらる。」

第一幕

—一杯のポーター—

(幕一第) — 迫緊の曲カルボ —



— バレット —

實に不愉快だ。……

お前達は僕の言ふ事を聞かない。……

登場人物

エドワード モルトン バレット
アルフレッド モルトン バレット
ジヨージ モルトン バレット
チャールズ モルトン バレット
ヘンリー モルトン バレット
セプテマス モルトン バレット
オクテヴィアス モルトン バレット
アラベル モルトン バレット
ヘンリエタ モルトン バレット
エリベザス モルトン バレット
ロバート ブラウニング
ダブリュー サータイス クック大尉
ヘンリー ビーヴァン
チエンバース博士

フォード ウォーターロー博士
ベラ ヘドレイ
ウキルソン

ロンドンのウキンポール街五十番地、エリザベス・パレットの寢室。後方の窓から街が見え、左手に戸、右手には暖爐がある。此の室の様子はエリザベスが一友人に送つた手紙によつてよく解る。「ソファアの様なベッドがあるだけで、本當のベッドはありません。室の隅に置いてある衣裳箆のそばに、大きなテーブルが置いてあります。ソファアはソファアのあるべき所、即ちアーム・チェアの向側に在り、箆の上には私の本をのせる爲に棚(紙や板や赤のメリノ羅紗の)が置いてあります。反対側の洗面臺の上にも又棚があつて、本棚になつて居ます。そしてチョーサーやホームアの胸像がイギリスとギリシャの詩人の代表として目につきます。他に三つの胸像も箆の上に置いてあります。窓邊に土を入れた箱があり、その中に赤豌豆やみづたがらしや晝顔等、思ふ存分はびこつて居ます。でも其の赤豌豆や晝顔等も二三日前までは大きな蔦の根に絡まれて弱つて居ました。蔦の枝はとても長く張つて、其先は階上のヘンリエタの室の窓際迄延び、又下の方は私の室の窓ガラスをすつかり覆つてしまつて居ます……」

時は夕暮。^{フラインド} 鎧戸と、カーテンがひかれ爐の火が弱く燃えてゐる。ランプの明り。ソファアに横は

つて居るエリザベスの足には蒲團が掛けてある。傍には醫師チエンバースが腰掛けてゐる。かなりの年配で眞白な髭のある紳士。彼は時計を手にして彼女の脈を見てゐる。エリザベスの愛犬フラツシユは籠の中に眠つて居る。テーブルの上には夕飯を食べ残した皿と、錫の大コップをのせた盆がおいてある。

チエンバース (脈を取つて居た彼女の腕を下ろし、自分の時計をしまひ乍ら) は、あ、さうですね。貴女の生氣が段々なくなつて、實に困つた事です。生きる力がないのです、一寸も……。どうすれば好いかなあ。

エリザベス (軽く) でも先生、一人の人間を長い間一室に閉ぢ込めてお置きになつたら、まさか其人に命と生氣が溢れ出ようとは思ひにならないでせう。何故私に氣分轉換として、本當に刺戟する様な事を教へて下さいませんか？

チエンバース エ！ 刺戟？

エリザベス 毎朝公園の廻りを三度走るとか、嘔吐體操をするとか、柔軟體操をするとか又は長い航海といふ様な……

チエンバース それが出来ましたらね——

エリザベス 今そんな事申上げるのは可笑しいんですけど……先生、御存知でせう、私が子供の時どんなお轉婆娘だつたか……

チエンバース ハア、それは皆聽いて知つて居ますよ。そして精神的には貴女はまだ今でもヤンチャ坊主です。本當の事を言へば、バー嬢は、いや失禮、エリザベスさん、つい貴女のニックネームが出てしまひまして——私は何時も貴女の御弟妹の呼んで居らつしやるのを聽いてるものですから——

エリザベス (笑ひ乍ら) まあ、かまひませんわ。

チエンバース 本當の事を言へば貴女は頭を働かし過ぎる様ですね。何でも適度にしないと云ふのは困つた事です。遊び半分に病氣してるんじやありませんよ、實際勉強し過ぎるのではありませんか。

エリザベス 勿論そんな事はありませんわ。

チエンバース まだギリシヤ語を一生懸命やつて居られるのぢやないですか。

エリザベス いゝえ、一日に二三時間以上はしませんわ。

チエンバース 現在何か文藝的な事に携はつて居られるのですか。

エリザベス アセナム其他二三の新聞に投稿してゐるだけですの。

チエンバース アセナムですか、それはく……そんな大さうな仕事を休んで何か氣輕い事にどうして心を轉換させないのでですか、さうですな、氣輕いと言つて何がいゝでせう。貴女は詩は續けてゐるでせうね。

エリザベス 氣輕くたやすいものですつてホムム、先生、私は明日ロバート・ブラウニングさんにお會ひしたときつとさう傳へますわ。

チエンバース ロバート・ブラウニング？ 貴女の詩人仲間ですか。

エリザベス ブラウニングを御存知ないなんて！

チエンバース でも詩は私の商賣外ですからね。

エリザベス それは解つてますわ。でもブラウニングの「ツデロ」をお讀みになつて、そして今度いらしつやつた時、詩は輕くてやさしいものだと言ふ事を私に説明して下さいな。

チエンバース 忘れないで讀んでおきませう。よろしいとも、若し其の詩が貴女を満足させるのでしたら、私は貴女の精神的な働を奪つてはならないと思つてゐるのです。

エリザベス 満足ですつて先生、おゝ私は詩を書いたり又は勉強する事が好きでなかつたら、私の生涯はどんな事になるかと思ふと恐ろしくなります。

チエンバース さうですね、全くさうです……此の家庭は住むのに氣持のいゝ家ではありませんね、病人を一人だけにして置くのに……

エリザベス いゝえ私はさうは思ひません……私は家のお父様パパがもつとお幸福シアワセだつたらなあと思ひますの、さうすれば私達みんなの生活ヤウスだつて随分變るでせうに……

チエンバース もつと幸福シアワセに？ そんな事は私に關した事ぢやないけれど體が丈夫で、お金がどつさりあつて、其上息子や娘のある愉快オモシロイな家庭を持つ人が、どうして自分の生活や家族の者の生活を重荷にしなくぢやならないのか、私には一向解りませんよ。途方もない事です、私には解りませんね。でもまあ、私が今言つた様に私には關係のない事です。然し貴女の事は仲々、いやとても心配ですよ、勿論この冬はひどかつたし、この春もやりきれませんね。といふのは英國は決して貴女の住む土地ぢやないつて事です。貴女にはイタリアがよろしい。

エリザベス イタリア！まあ先生まるで夢の様な事ですわ。

チエンバース さうです、そして夢のまゝで終るかも知れませんね。この陰氣な環境から貴女を救出す爲に何か、さうですね……何でもいゝから貴女の爲に變化をすゝめる事が出来さへしたら……と思ふんだが……時にエリザベスさん、最近一寸でも歩いて見た事がありますか。

エリザベス いゝえ殆んど……去年のクリスマスに落つこちてからすつかり勇氣がなくなつて……

チェンバース え、覚えてゐます。

エリザベス 先生も御存知の通り父か弟かど、朝私をベッドからソファアに連れて来てくれて、夜になると又ベッドにつれ戻して呉れます。時々私に冒険的な気分が起ると、女中が私を支へて部屋を歩かせてくれます。

チェンバース 今も冒険的になれますか。

エリザベス いゝえ別に……

チェンバース でも試しに二三歩、歩いて見ませう。(立上り乍ら両手を取つてやる) 静かに、さう、ゆつくりと……急いぢやいけない。(助けられて彼女立上る) そら立てた、(彼女少しよろける、彼支へる) ふらくしますか。

エリザベス え、少し……

チェンバース 目を閉じて私に凭り掛りなさい。すぐよくなりますよ……少しはいゝですか。

エリザベス え、ずつと……

チェンバース さあゆつくりと……氣を付けて歩いて御覽なさい。心配しちやいけませんよ、手を離しやしませんからね。

(危つかしい足取りで二歩歩む。彼は彼女の手を取つたまゝ後すざりする)

あゝ床を見ちやいけない。ちやんと前を見て……あゝその調子、それでよろしい、ステキ、ステキ!

(六歩ほど歩いて後、よろめきくづれかゝる)

エリザベス あつ先生!

(すばやく彼女を抱き上げ、ソファアに連れ戻つてやる)

チェンバース 氣が遠くなりさうですか。

エリザベス いゝえ、私もう大丈夫ですわ。あの私本當に……、只、膝なんですわ。膝がしつかりしないんです。

チェンバース いや、歩けない様な足なら無用の長物ですよ。五つの子供みたいな足ですね。食慾はありますか、やつとつつく程度でせう?

エリザベス 私興へられた物は、何でも食べる様に努めてゐますの。でも一寸もお腹が空かないんですもの……(急に元氣に) 先生、私思出しましたわ。先生覚えていらつしやいます? ポーターつて飲物が私に良いつてお父様が先生に申上げました事を……

チェンバース はあ仲々いゝ御注意でした。

エリザベス でも堪忍して下さい。そんなひどい事! 私一日に二度も大きな錫のコップで飲まなくちやならないんですもの……でそのたんび私は壽命の縮まる思ひをしますの。

チェンバース これはいく！

エリザベス いゝえ、大げさに言つて居るんぢやありません。本當に壽命が縮まる思ひですの。
チェンバース だがエリザベスさん、其の非常に有効な造血作用は第二としても、ポーターは口觸りのいゝ飲物と言はれて居ますよ。朝食の時に焼肉かチヨツプにそへて、ポーターを飲むほど私には嬉しい事はないんです……

エリザベス (囁く様に慄へ聲で) 朝御飯に？ 私ポーターなんて本當に恐いと思へないんです。見るのも恐いんです……嗅ぐのは尙更、飲むなんて事はとても堪らないんです。私がこんなに甚く嫌ひなものが私の爲めになるなんて事決して有り得ませんわ。お父様お父様にお願いしたつて何にもありませんわ。だつてこんないまいましい事お父様お父様が言ひ出したんですもの……でもねえ、先生先生が若し何か外の物を……どんな物だつて私かまひませんわ……ポーターと同じ位よく効く物をお父様お父様に教へて下すつたら……

チェンバース (笑ひ乍ら) 可哀想に可愛いお嬢さん、えゝ勿論私が言つてあげますよ。

エリザベス まあ嬉しい！ 本當にいく有難う御座います。

チェンバース ぢやあその代りに暖い牛乳をコツプに二杯飲むのは如何です？

エリザベス 私ミルク嫌ひだけど、先生がポーターを飲まなくてもいゝ様にさへして下されば、私一

日中だつてミルクを飲みますわ。

(ノックの音)

お入り、(エリザベスの召使ウキルソン登場。二十五、六の綺麗な賢しこさうな顔つきの女)

なあに、ウキルソン？

ウキルソン 御免遊ばせ、お嬢様、あのう、(醫者の方に向き) 御主人が先生のお歸りになる迄に、

是非お目に掛りたいと仰言つて居られますが……

チェンバース よろしいとも、よろしいとも、(時計を見乍ら) あゝこれは喋り過ぎた。御主人は書齋かな？

ウキルソン はい。

チェンバース ぢや失敬しますよ。エリザベスさん、さやうなら。(握手する)

エリザベス 先生さやうなら、(小聲で) お忘れにならないでせうね。

チェンバース エ？

エリザベス PORTER (口で綴り乍ら。)

チェンバース (笑ひ乍ら) 今すぐお父様お父様に言ひますよ。

エリザベス まあ有難う、先生本當に有難う。

チェンバース (まだ笑ひ乍ら) お休みなさい。(ドアの方に行き乍らウキルソンに) いや結構です、
階下迄送つて下さらなくても……勝手は解つてますから……

ウキルソン 先生有難う存じました。

(チェンバース博士退場) お嬢様、これからお嬢様のお手紙を入れに参りますが、フラツシユを連
れて参りませうか。

エリザベス (烈しく) ウキルソン、それ持つて早くあつちへ。

(ポーターのコツプを指し乍ら)

ウキルソン (困惑して) 何でございますか、お嬢様。

エリザベス 私はそれを食事の時に飲む勇氣がなかつたの。出来るだけその恐ろしい瞬間を延ばして
居たの。

ウキルソン ポーターの事で御座いますか、お嬢様。

エリザベス チェンバース先生はもう飲まなくてもいゝと仰言るのよ。だから彼方へやつて頂戴。早
く、早くよ。そしてもう二度とポーターなんて言葉を言はないでお呉れ。

ウキルソン はい、お嬢様、かしこまりました。で御座いますがポーターを飲んでゐらつしやいま
せんでしたらあの……

エリザベス (耳を掩ふて) 二度と其の言葉を言はないでつて言つたぢやないの、あちらへやつてお
呉れ、ね、後生だから……

ウキルソン 承知致しましたお嬢様。おいで、フラツシユ。

(犬を抱上げて室外に出す。それから盆を取りにやゝ心配氣にエリザベスを見乍ら戻つて来る。

エリザベス 俄に笑ひ出す。ヘンリエタ突然登場。美しい元氣のいゝ華やかな乙女である)

ヘンリエタ 何を笑つてるの、お嬢様?

エリザベス ウキルソンは私が氣狂になつたと思つてるのよ。

ウキルソン 氣狂でございますつて? お嬢様、何を仰言るので御座いますか。

エリザベス (尙も笑ひつゝ) あれを、あの黒い飲物をあちらへ持つてつて呉れるの? 呉れないの?

ウキルソン お下げ致します。お嬢様。

(ウキルソン退場)

ヘンリエタ 何故お姉様が笑つてるんだか私には解らないわ。だけど説明しなくつてもいゝわよ。唯
笑ひを止めないで頂戴。もう笑へないなら私くすぐつてあげてよ……あの……御飯の時、大變だつ
たわ。

エリザベス だけど、ヘンリエタ。

ヘンリエタ 大變だつたの、大變！

エリザベス お父様の事？

ヘンリエタ えゝさうなの、本當に大變だつたわよ、お父様は例によつて御機嫌が悪くつて……とてもの不機嫌だつたの……ブツ／＼言れる事はつらいわね、どなりつけられるのはもつとつらいわ、けれど黙つてゐられるのは一等つらいと思はなくつて？

エリザベス えゝさうね、だけど……

ヘンリエタ お食事中に十言も口がきかれなかつたと思ふわ、而も其の殆んどが、しりきれなんですもの、お父様があのチーツとした目を話手の方へお向けになつたらよ、解つて？ 最後の廿分許りの間、食堂ではナイフとフォークの音が臆病さうにしてるだけだつたわ。食事が終ると直ぐに、お父様は葡萄酒を書齋に運ぶ様にお言ひつけになつたの。あゝそれから有難い事に、お父様は殆んどそれと同時に書齋にお入りになつたわ。

エリザベス チエンバース先生が今御一緒だわ。

ヘンリエタ あゝお姉様、先生のお姉様の容態についての報告が餘りよくなきやいゝのだけど……私達皆の爲に……

エリザベス だけど、ヘンリエタ

ヘンリエタ (俄かに後悔の面持でソファアの前に膝をついてエリザベスに抱きつき) 許してね、ねこんな事言ふの私の悪い癖なの、私そんな意味ぢやなかつたのよ、解つて？ お姉様がよくなつてさへ下さりや、此の世の中で何も氣にかかる事はないわ、お解りでせう？ ね？

エリザベス 勿論解つてゝよ、馬鹿な子ね、だけど貴女の言つた事は、お父様を人でなしにしてしまふわ、そしてそれは全く嘘よ、お父様獨特のやり方で子供達を可愛がつて下さつてるのよ。

ヘンリエタ 獨特のやり方つて……いゝえ違つてよ、私の言つた意味は、どんな報せだつていゝ報せは、現在のお父様をきつと益々不機嫌におさせするといふ事よ、何故だか知らないけどさうなのよ。(急に心配さうに) お姉様、チエンバース先生はお姉様の容態はいけないつて仰言つたのぢやないでせう？ お姉様御悪くはないのでせう？

エリザベス えゝ私同じ事なのよ、よくも悪くもないの。

(アラベル登場、背の高い色黒の眞面目さうな女)

アラベル まあ貴女此所に居たの、ヘンリエタ、私方々探し廻つたのよ。お父様が書齋からこの手紙を貴女に渡すやうにいつて。

ヘンリエタ 私に？ まあ／＼お父様が御書齋からお手紙下さる時は暴風を警戒しなくつちや……

(開いて讀む)

「お前の叔父と叔母のヘドレイと従姉妹のベラが、今朝豫定より早くロンドンに着いたと言ふ事だ。今フエントンのホテルに居られる。ベラと許婚者のビーヴァン氏は明日三時にお前達を訪ねたいと言つてゐる。勿論お前とアラベルは二人を迎へる爲めに家に居るだらうが、若しエリザベスの氣分が良ければお前達は二人を二階へ案内して會はせなさい。私は叔父と叔母と従姉妹とを來週の木曜日の晚餐に招待する様に手紙を出しておいた。父より」まあ!

アラベル 私お父様がお食事の時に何故あんなに……あんなに不機嫌だつたか今解つたわ。

ヘンリエタ 苦虫を噛みつぶした様につて言ふつもりでせう?

アラベル 何時でも一番醜い言葉を使はなければならぬの?

ヘンリエタ えゝさうよ、一番醜い事を表現する時にはね。あゝだけど、お父様は本當に變な方だわ、きつと朝食の時にヘドレイ家からあのお手紙を受取つたのよ。何故その時に言へなかつたのでせうね。何故お父様はお食事の時に仰言らなかつたのかしら。充分に機會があつたのに……

アラベル お父様が餘り不機嫌だつたからでせう。

ヘンリエタ (顰面して) 不機嫌、えゝ勿論私達は皆お父様が人に普通の禮儀を拂ふ事がお嫌ひな事知つてゐるわ。そして今度はお父様はヘドレイ家に好意を、如何しても示さなくちやならないんだわ。

御無理もないわ……不機嫌なもの……

エリザベス あんた、ひがんでゐるのぢやない? お父様はお家で私達のお友達をお迎へする事に減多に反對なさないわ。

ヘンリエタ 一杯のお茶と一切のお菓子と……それからお父様が市から歸るまでにお客様が歸つてしまつてゐたらね……兄弟姉妹の中で、誰か今までに他の人を晚餐に招待するのを許された事あつて? 又はお晝御飯にでも……だけどそんな事今更言つたつて始らないわ。私腹が立つのは明日の三時にお友達と約束があるといふ事よ。でも彼にはとにかく延ばしてもらはなきやならない。

アラベル (するさうに) 何故?

ヘンリエタ 何故つて何よ。

アラベル (前の如く) 何故貴女のお友達に延ばして貰はなきやならないの? 何もあのベラと許婚つて人が其のお友達を食べるわけぢやなし……

ヘンリエタ (怒つて) それが貴女に何の……何の關係があるの?

アラベル (驚いて) でもヘンリエタ

ヘンリエタ あたしの事、ほぢくりたてるやうな人嫌ひ!

(急いで部屋を出てドアをピシヤリと閉める)

アラベル (困つた様に) まあ一體今晚はどうしたのかしら、何時もクツク大尉の事ひやかしたらとても嬉しさうなのに……

エリザベス 眞剣になり始めたのかも知れない。

アラベル まあ、私さうでない事を願ふわ。貴女二年前バルフレイさんが、あの人に結婚を申込んだ時の事を覚えてゐるでせう、あのお父様との怖しい場面を……

エリザベス 私そんなの忘れたいわ。

アラベル 家ではお父様が決してく結婚を許して下さらないつて事、何故ヘンリエタ解らないんでせうね、私は一寸も困らないけど……だつて誰にもそんな風に私ひきつけられやしないんだもの。貴女もだわね。

エリザベス (笑つて) 私!

アラベル 勿論よ、今はそんな事全く問題外だわ、お父様がいらつしやつたつて、いらつしやらなくたつて……けど貴女は以前もつと若く元気な時でも一寸も男の方と交渉がなかつた様ねえ。

エリザベス (面白半分に) 男の方が私に機會を與へてくれないのでせう。

アラベル まあでも貴女は少女の頃はとても美しかつたわ。

エリザベス クツク大尉つてどんな人? 立派?

アラベル さうね、えゝ本當に立派よ、だけど餘り物を言はないわ、只坐つてヘンリエタを見てるだけよ。

エリザベス ヘンリエタは可愛いわ。

アラベル でもお父様はあの人達二人を決して理解なさらないと思ふわ。一寸でもそんな事聞いたらクツク大尉は出入差止めよ、そしたらヘンリエタがどうなるか考へても怖ろしいわ。假令大尉があんな少し許り、月給以外にお金のある士官でなくつて、財を捧げて來たつて同じ事よ、貴女だつてそんな事解つてるわね。

エリザベス 可哀想なヘンリエタ。

(ヘンリエタ再び登場。足早にアラベルの許に行きて接吻する。)

ヘンリエタ 堪忍してね。

アラベル いゝえ私一寸もいちめる心算ぢやなかつたのよ。

ヘンリエタ いぢめやしなかつたけど嫌がらせたわ。(笑ふ) 私本當にお父様の子ね。

エリザベス ベラと許婚つて人が明日來てくれたら、アラベルが私に會はせにその人等を此所につれて來てくれるわ。だから貴女は客間でクツク大尉のお相手をなさいな。

(アラベル困つた様な様子)

ヘンリエタ まあ私の守護神様!!

(エリザベスを抱く)

エリザベス だけど私三時半には御部屋が要るの。ロバート・ブラウニングさんがいらつしやるから。
ヘンリエタ (興奮して) まさか?

アラベル だつて私は……

ヘンリエタ 勿論、私お姉さんがこの數ヶ月間ブラウニングさんと文通していらつしたの知つてらわ。あの人に宛てたお手紙、私何度か出しに行つたんだもの。だけどお姉様は他の澤山の文藝家とも通信していらつしやるし……お姉さんはその人達に絶対に會ひにならないでせう。

アラベル お父様はお許しになつて?

エリザベス 勿論よ。

ヘンリエタ だけど……何故お姉様はブラウニングさんだけ例外になさるの、あの方素晴らしく素敵な方つてね。でも……

エリザベス (笑ひ乍ら) まあヘンリエタ、貴女は手のつけられない人ね。

アラベル あの方とても訪問したがつてらつしやるつて、私ケニヨンさんから聞いたわ。

ヘンリエタ でも一寸前には、お姉様はブラウニングさんにお會ひする意志はないつて言つたわよ。

エリザベス なかつたわ……そして今でも特にお會ひしたかないわ。

ヘンリエタ どうして?

エリザベス (軽く) 何故つて、私、心は孔雀ウツクの様に空なのよ。解る? 他の人が私の詩を褒めてくれる時其作者はその詩の様にすばらしくつて、美しいつて思ひ勝ちなものよ、少くとも私は何時もさう思ふわ。それで人々に幻滅を感じさす事は恥だわ。

ヘンリエタ 馬鹿な事言ふもんじゃないわ、お姉様は本當に面白くて綺麗な方よ。

エリザベス (笑ひ乍ら) それは旅行案内で廢墟でも美しく書いてある様な物ぢやない?

ヘンリエタ まあ、お姉様つたら、私そんな心算ぢや……

エリザベス 勿論さう、でない事解つてらわ。事實、ブラウニングさんはとても熱心にそれを主張なさるのよ。だから私負けたわ。私あの方が失望なさるのを人に見て貰ひ度くないの。だからベラとビーヴァンさんには、ブラウニングさんがいらつしやる前に出ていたよいてね……

(戸を叩く音)

お入り。

(オクタヴィアス・パレット登場。十八歳位で少々吃る)

お入りなさい、オキイ。

オクテヴィアス 御加減どうかとちよ、一寸おたづねに來ました。そ、それからお休みつて言ひにね。

(身を屈めて接吻する)

先生は好いつて言つた?

エリザベス えゝ。

ヘンリエタ (オクテヴィアスに父パレットの手紙を渡し乍ら) オクテヴィアス、それを讀んで御覽なさいよ。

アラベル (オクテヴィアスが手紙をよむ間) まあ、私、明日の午後エクセタ・ホールで開かれる支那のウエスレイアン・ミツションについての講演を聴きに行くのをすっかり忘れて居たわ。

オクテヴィアス さう、君は聴きに行く事は出来ないよ。(父パレットの手紙をみせびらかす) 之は確にお、王座の法令だよ。

ヘンリエタ (大げさな表情をして) 一八四五年五月の今日、十九日、ウキンポール街五十番地の書齋にて發令さる。お父様萬才!

アラベル (たしなめる様に) まあ、ヘンリエタ。

(戸を叩く音)

エリザベス お入り。

(セプテマス・パレット登場。オクテヴィアスより一つ年上。オクテヴィアス及び其他の後に登場する。パレット家の息子達らしく、燕尾服を着てゐる)

まあ、セプテマス。

セプテマス 御加減如何ですか、パー姉様、(接吻し) お醫者さんはいゝと言ひましたか。

エリザベス えゝ、有難う。

オクテヴィアス おい、兄さん、今度の木曜日にへ、ヘドレイ一家族が家でしよ、食事をやるんだぜ。

セプテマス ベラ棒奴、そんな事があるものか。

(戸を叩く音)

エリザベス お入り。

(アルフレッド・パレット登場、セプテマスより年上)

アルフレッド、お入り。

アルフレッド 時に今晚は我々の姉君パーは如何? 先生は喜んでましたか。

エリザベス えゝ。

(戸を叩く音)

お入り。

(チャールルス・バレット登場、アルフレッドより稍年長)

チャールルスさん、お入り。

チャールルス パー姉様、今夜は御加減如何ですか、(彼女に接吻して) チェンバース先生の鑑定書が良い様に希つてますよ。

エリザベス え、有難う。

(戸を叩く音)

お入り。

(ヘンリー・バレット登場、チャールルスより少し年上)

ヘンリー 時にパー姉様、御気分如何です?

(彼女に接吻する)

お医者さんは患者さんが気に入りましたか。

エリザベス え。

ヘンリー それは結構、お顔色が少し良い様ですね。どう思ふ? チャールルス。

チャールルス エ?

ヘンリー お姉様の顔色が良い様だつて言ふのさ、さう思はないかい?

(戸を叩く音)

エリザベス お入りなさい。

(ジョージ・バレット登場、ヘンリーより稍年長)

ジョージ して今晚は、パーお姉様は如何ですか、(接吻して) 先生は今来てたんだつてね、餘り容態がよくないんじゃないかと心配だが……

エリザベス え……まあ、どうしてとせう。

ジョージ 貴女は餘り顔色が良くない様ですよ、ね、ヘンリー。

ヘンリー 僕は却つてかなり良い方だと思ふ。ね、さうだらう? チャールルス。

チャールルス エ?

オクテヴィアス おい兄さん、ヘドレイの家族が突然市にやつて来たんだよ。ベラと彼女の許婚者が明日の午後、姉さん達をほ、訪問するんだとさ。それから木曜日にはベラとベラの両親とが盛大に此所で食事をするさうだ。

アルフレッド ヘンリー、セプテマス、(一齊に) 此所で食事をするつて?

ジョージ 成程ね、我々が今夜やつた様に、あの人達も大いに愉快に食事をするがいゝや。

ヘンリート 兄さんはビーヴァン君に逢つた事があるね。

ジョージ あるよ。

ヘンリー どんな人だい？

ジョージ まあ尊大ぶつたロバだね。然し親切だ、仲々やさしい人だよ。若し彼が小銭を持つて居るとしたら一年に一万ポンドだね。

ヘンリエタ まさか。

ジョージ そして彼のお祖母さんが死んだら、もう一万ポンドだ。

アラベル まあ。

ヘンリエタ それは餘り不當ですよ。ペラが、そんな幸福を掴む程の事をしてゐるものですか。

オクテヴィアス 兄さんは、彼は、尊大なロバだと言つてますよ。

ヘンリエタ それや妬いてるのよ、誰も一年に一万ポンドの收入の人が（彼の吃りを真似て）そそそ、尊大なロバなんて筈はあけませんよ。

ジョージ お父様が來週商用でブリマウスに行かれると言ふ事を聞いたら、君達がすばらしく喜ぶだらうね。それから……

（エリザベス以外の皆の口から興奮した喜びの聲）

ヘンリエタ それから？ ジョージ、もつと話して、そして？

ジョージ そして少くとも二週間は歸つて來ないだらうと言ふ譯さ。

（満足のつぶやき、ニコく顔）

ヘンリエタ まあ、ジョージ、（兩腕を彼の首に廻し）何て素敵、何て素晴らしいんでせう。ジョージ、ボルカ踊らない？

ジョージ 子供じみた真似をするものぢやない。

ヘンリエタ さう、ぢや私踊るわ。

（彼女はボルカの節を口ずさみつゝ部屋中ボルカを踊り廻る。他の者は面白さうに見物する。オクテヴィアスは手拍子を取る。戸が靜かに開いてエドワード・モルトン・バレット登場、六十歳位の立派な引締まつた體格の紳士）

エリザベス お父様……

（氣まづい沈黙。ヘンリエタは部屋の真中でダンスを止め身動きもせず立つて居る。バレットは暫く全く無表情な顔で前方を見乍ら部屋の入口の向ふに立つてゐる）

今晚は、お父様。

（バレット返事もせず部屋を横切り暖爐を背にして立つ。誰も身動きする者なし）

パレット (冷やかな控へ目の聲で) 實に不愉快だ。(暫く間) 夕方、皆が姉さんの所に來て暫く靜かに話をするのは少しも悪い事ではない。だが一度ならず何度も注意したと思ふが、姉さんの容態が大變悪いのに、お前達が三人も四人も一緒に姉さんの部屋に入るのはよくない。僕の言ふ事をお前達はきかない、それは何時もの事だが……(息をついで) 皆もよく知つてゐる様に姉さんは一寸興奮してもいけない、夜寝る前は特に絶對靜肅が必要なのだよ。だのにお前達は手に負へない子供達の様子に姉さんの廻りを跳び廻つて……何と言ふ事だ。

(ヘンリエタは一寸神經質らしい含み笑をする)

何か可笑しい事を言つたかね? ヘンリエタ、そんな覚えはないが……

ヘンリエタ あもう、御免なさい、お父様。

パレット それから僕が部屋に入つて來た時に何をしとつたのか。

ヘンリエタ 私、お姉様にボルカの踊り方を教へてたの。

パレット ボルカ?

ヘンリエタ ボルカの踊り方をです。

パレット うむ。

(暫く間)

オクテヴィアス (せかせかと) ぢや姉さん、ぼ、僕は、お、お休みつて言はう。

パレット おとなしくして僕の言ふ事をしまひまで聽いて欲しいものだ。

オクテヴィアス ぞ、御免なさいお父様、ぼ、僕はもう終つたのかと思つたんです。

パレット (怒つて冷たく) 馬鹿にしてるのか。

オクテヴィアス い、いゝえ……お父様、僕決してそんな……

パレット まあいゝ、さて……

エリザベス (口早にいらく) お父様確に私がお父様の御立腹の原因なんですから申上げるのですが、私時々は少し位騒ぐのとても好きなんです。(一寸息をついで) あもう家中の人に此の部屋と一緒に居て貰へる事はとても嬉しいので、私の體にさわるなんて事決してないわ。

パレット 失敬だがエリザベス、何がお前の爲に良いか悪いか一番よく解るのはお前ぢやない……そしてそれで僕がこゝへやつて來た用事について、話をするんだが、ドクター・チエンバースがお前に説きつけられて、食事の時にポーターを飲むのを止してもよいと言つたと、たつた今僕に話したんだ。エリザベス あらそんなに説きつけたりしませんでしたわ。お父様、私がポーターは大嫌ひだつて言つたら、ぢやその代りに牛乳をお上りつて、一遍に承知しましたわ。

パレット 私はポーターと牛乳と、強壯劑としてどちらが効力が確かだかよく彼に聞いたのだよ、そ

したら、彼はそりや何と言つてもポーターを第一としなきゃならないと言つたんだ。
 エリザベス さうかも知れませんが。でもお父様、嘔吐が出る程嫌ひなものを飲んでお薬になるつて事
 が私には解りませんわ。

パレット たつた今言つたぢやないか、お前の身體に何がよいか、悪いか一番よく解つてるのはお前
 ぢやないのだよ、序に言つとくが克己は藥、氣儘は毒だよ。

エリザベス 私が牛乳を飲むのが向ふみずの我儘だなんてお考へになるんですたら……お父様、そり
 や違ふわ、私牛乳はただポーター程嫌ひぢやないといふだけなの。

パレット お前の好き嫌ひなんかこんな場合全く問題ぢやない。

エリザベス だつてお父様。

パレット 解つてくれ、エリザベス、お前がポーターを飲まない、僕は本當に立腹するとお前に警
 告するのは、お前の爲を思ふからこそだ。

エリザベス (むつとして) だつて……だつてチエンバース先生自身が……

パレット ドクター・チエンバースが言つた事をお前に話したらう。

エリザベス え、だけど……

パレット 晩御飯の時ポーターを飲んだかね。

エリザベス いえ。

パレット ぢや床に就く前に飲みなさい。

エリザベス あらバ、本當にそれは、あんまりだわ。私、私あんな嫌なもの、とても平然として飲
 めやしないわ。

パレット よろしい。お前に無理に飲ます譯にはゆかない。お前はもう子供ぢやないのだから……だ
 がお前が思ひかへす機會を與へてやらう、ポーターのコップを寢臺の傍に置く様にいつておかう、
 昨日はお父様の言ふ通りにしましたと明日僕に言へる様に希望しておく。

エリザベス すみません、でも私飲めませんわ、屹度。

パレット (ヘンリエタに) 臺所へ行つてポーターを持つて來なさい。

ヘンリエタ いや。

パレット 何だと。

ヘンリエタ (怒と興奮に聲をふるはせて) そりや……そりやあんまり可哀想だわ、お姉様があんな
 に嫌がつてるのに、お医者さんが飲まなくても良いつて言つたものを、バ、が御姉様をたゞいぢめ
 るのよ、お父様が、お父様は人をいぢめることが好きなものですから。
 パレット 僕は臺所からポーターのコップを持つて來いつて云つたんだよ。

ヘンリエタ いやだわ。

パレット 三度も云はせるのか、(突然聲を荒らげて) さあ、今すぐ持つて来なさい。

エリザベス (激して) お父様……行つて取つてらつしやいヘンリエタ、すぐに、我慢が出来ないわ、
こんな事……

ヘンリエタ だつて私……

エリザベス お願ひ……お願ひだから……

(ちよつとためらつて後、ヘンリエタは向き直つて出て行く)

パレット (暫くして静かに) 皆、姉さんにお休みを云ふ方がいゝね。

アラベル (耳元で) お休み、お姉様。

(彼女はエリザベスの頬に接吻する)

エリザベス (無神経に接吻を受けて) お休み。

(アラベル退場。そして弟達は各自エリザベスの所に行つて頬に接吻し、夜の挨拶をする。パレットは暖爐の前に立ち、エリザベスはソファアに腰掛け、共に無表情な顔つきで前を見つめてゐる。暫し間、ヘンリエタ、小さき盆にコップをのせて持来り入口のやゝ外側に立ち、息をはずませ父の方を睨むやうに見る)。

エリザベス それ、此所に持つて来て頂戴。

(ヘンリエタ、彼女の許に歩みよる。エリザベス、コップを取り、飲まうとする。その時パレットは突然、然し乍ら静かにそれをとめる)

パレット およし。

(ヘンリエタを横に押しやり、エリザベスからコップを取りあげる。ヘンリエタに向ひ) もう行つてもいい。

ヘンリエタ お休みなさい、パー。

(エリザベスに近よらんとするが、パレットは之を押返す)

パレット 行きなさい。

エリザベス お休み。

(ヘンリエタ、父に挑みかゝる様な様子で退場。パレットはコップを暖爐の上に置きソファアの所に行つてエリザベスを見下して立つ。彼女は怯えた様な目を大きく見開き、父を見上げる)

パレット (やさしく) エリザベス。

エリザベス (囁く様に) えゝ?

パレット (手を彼女の頭に置き、少しく仰向かせ乍ら)

何故、さう云ふ風に儂の顔を見るのだね、吃驚したのか?

エリザベス (前の如く) いゝえ。

パレット 震へてゐるね、どうしてだ？

エリザベス ぞ、存じません。

パレット 儂を怖れてるんぢやないね？

(エリザベス何か云はうとするが、父は直に続ける)

いや／＼それを云つちやいけない、それを考へると儂は堪らん。

(同じくソフアーに掛け彼女の手をとる)

此の世の中でお前は儂にとつてすべてなんだよ、お前も知つてゐる通りに。お前がなければ此の儂は全く孤獨なんだよ。それもお前は知つてゐるね、でお前、若し、お前が儂を愛してゐるなら儂を怖れる筈がない。

愛は恐怖を追出してしまふものだからね。お前は儂を愛してゐる。ね？ お前は、お父さんを愛してゐるね？

エリザベス (小さく) えゝ。

パレット (熱心に) で、お前は儂の云ふ事をきいて、其の愛を示してくれるだらうね。

エリザベス 私、解りません。飲まうとしましたのに……

パレット (急いで) さうだ、愛からでなく怖れてやつたんだ。お聞き、儂は今若しお前が儂の云ふ事を聞かなかつたら、儂は怒ると云つたが、それは取消す。何れにしても、儂は決してお前を叱りやしない。儂の命じた一寸した事をするのをお前が嫌がるため、どんなに此のお父さんを悲しませ、傷つけたか、とても儂の態度や、言葉、又何か暗示等では決してお前にや解らないのだよ。

エリザベス あゝ、どうぞ、もうおつしやらないで下さい。みんな小さな、つまらない事ですわ……コップを下さいまし。

パレット (立上り乍ら) お前は自分の自由意志で飲まうとしてゐるのだね、それとも……

エリザベス あゝお父様、もう水に流して忘れませう。たつた一杯のポーターの爲に、家中を不快にしちやつて、私たまりません。

(パレット、コップを興へる。彼女はそれをぐつと飲む。彼は再びコップを暖爐の上に置き、ソフアーの所に歸り、エリザベスをいとしさうに見下す)

パレット 今晚は餘り気分は悪くなささうだね。

エリザベス (氣乗りせぬ様子で) えゝ、お父様。

パレット 疲れただけかね？

エリザベス えゝ、疲れただけ。

バレット ではお前一人になつた方がいゝやうだね。その前に一寸お祈りしやうか。
エリザベス えゝ、どうぞ。

(バレットはソファアの傍に膝まづき、手を組み、顔をあげて眼を閉じる。エリザベスも手を組むが眼をあけたまゝでゐる)

バレット 全能にして慈悲に富ませ給ふ御神、願はくば、吾が貧しき祈りをお受け入れ下さい。測り知れぬ御智慧をもちて、貴方は貴方の娘エリザベスに悲しき重き、苦しみを與へる事をよしとなし
たまひました。

長年彼女は病に苦しんで居ります。もし貴方の御恩寵の内に導かるゝ事がなければ、彼女はなほ苦し
み續けるであります。何卒愛する者を、こらしむると云ふあの惠深き御言葉を、彼女に知らしめて
下さい。彼女をして苦しみに堪ふる事を得さして下さい。何卒彼女の心も魂も、貴方とそして今に
も彼女の前に開けて来るかもしれない永しへなる聖國ミクニとに、ゆだねる事を得さして下さい。今宵も
彼女を貴方の愛の御手の内にお守り下さい。頑固カククナにして我儘な冷たき思から、彼女の心を淨め給ふて、
彼女を守り慰め下さい。これらの願を御子イエス・キリストの聖名ミナによりて捧げ奉ります。アーメン
エリザベス アーメン。
バレット (立上りエリザベスの額に接吻し) お休み。

エリザベス (無感覺にその接吻を受け) お休みなさいませ。

(バレット退場。暫しエリザベスは身じろぎもせず前方を見つめてゐる。戸を叩く音)
お入り。

(ウキルソンがフラツシユをつれて入り来る)

ウキルソン (籠に犬を入れつゝ) もうお休みなさいますか? お嬢様。

エリザベス あゝ、ウキルソン、とても嫌だ、嫌だ、本當に何も彼も嫌になつちやつた。何時迄たつ
たらはてるのだらう。

ウキルソン はてるですつて? お嬢様。

エリザベス 生き乍らのこの長いノ、灰色の死!

ウキルソン まあ、お嬢様、そんな事仰言るものではございません。

エリザベス さうだ、私もいけないと思ふけど……フラツシユは元氣に走り廻つて?

ウキルソン えゝゝ、お嬢様。

(暫し間)

エリザベス 外は晴れてる? ウキルソン。

ウキルソン はい、そして大變暖でございます。それにとつても綺麗な月も出て居ります。

エリザベス (熱心に) あゝ月! ね、此所から見えるかしら、

ウキルソン さあ、如何でございませうか。

エリザベス カーテンをあけて……そしてブラインドもあけて頂戴。

ウキルソン

(云はれた通りする。ランプの光に和いだ月光がエリザベスの顔に流れる)

さうら、お嬢様……

月は丁度煙突の上にかゝつて居ります。美しく御座いませう。

エリザベス (夢見心地で) えゝ……えゝ……ね、ランプ消して、暫く私を一人にしてくれない?

私まだ一寸も眠むたくないの。

ウキルソン かしこまりました。お嬢様。

(ウキルソン、ランプを消して退場。エリザベス強い月光を浴びて暫し大きく開いた目で、月をみつめてゐる。やがて息づかひが荒くなり、全身を震はせて、むせび入り横に伏せて腕に頭をうづめる。彼女のしめつける様な、すゝり泣きのみ聞えて)

—幕—

第二幕

—ロバート・ブラウニング氏—

翌日の午後。窓掛は兩側にあげられ、^{ブラインド}錠戸は上げられて、日光が室の中に差し込んでゐる。エリザベスのソファアに近い小卓の上には、手の附けてないお菓子の入つたお皿が載せてある。
(エリザベスは足掛けふとんで、足を包んでソファアに横たはつてゐる。彼女は指を自分の捲毛に通して見たり、顔からそれを拂ひ退けたりしながら、非常に熱心に一冊の小さな本を讀んでゐる。犬のフラツシユはバスケットの中に寝そべつてゐる)

エリザベス (困惑した調子で)

すべては花瓣、一つも刺がなく、

彌撒ミサの時に注がれる葡萄酒の滴りのやうに美味しい。

咲き亂れた花々を以つて。

(戸を叩く音。エリザベスは夢中になつてゐて氣付かない。彼女は額を押へながら繰返す)
すべては花瓣、刺が一つもなく、葡萄酒の……

(ノックの音が又聞える)

滴りのやうに美味しい……お入り……

(ウキルソンが入つて来る)

あゝ、ウキルソン……私はとてもお晝食を待つてるんですよ。

ウキルソン (ぼつとして) 御嬢様はもうお晝食をお済しになつたぢやございませんか。

エリザベス えゝ、さう、勿論……そして私はとても美味しく頂いたわ。

ウキルソン 貴女は唯お魚をつゝいて御覽になつただけでしたよ。お嬢様。あの素敵なお肉の一番上等の所を私はそのまゝ片付けました。プディングにも、黒苺のジャムつけのコーンブラワ・プラマンジュにも、手をおつけになつていらつしやいませんね。

エリザベス (不思議さうに皿を見て) あら、でも、もう遅すぎるわ。

(彼女は再び夢中になつて本を読み出す。ウキルソンはそのお皿を下げて、直ぐ又入つて来て戸を閉める)

ウキルソン (爐上ストーブの棚の所へ行つて、薬用のコップに薬を測つて入れる)

お嬢様。今すつかり御氣分がよろしい様でしたら、私はフラツシュを少し散歩に連れて参りませう。

(エリザベスは本に夢中になつてゐるので聞えない。ウキルソンは薬のコップを彼女の方に差出

す)

お薬でございますよ。お嬢様。

エリザベス (なほ本を見つめながら、コップを受け取つて) 有難う……

(手にコップを持つたまゝ読み続ける)

ウキルソン (窓の方へ行き) 錠戸ブラインドをもう少しお下げした方がよろしいと思ひますが。お嬢様には日

光があまりあたると、よくございませんからね。(半分錠戸ブラインドを下げる)

エリザベス (本を見つめながら、まだ呑んでゐない薬のコップを差し出して) 有難う……

ウキルソン お嬢様はまだお飲みになつていらつしやいませんよ。

エリザベス まあ……(彼女は薬を飲みほし、一寸しかめ面をして、コップをウキルソンに返す)

戸を開けておくれ、ウキルソン。今日お晝からお客様がいらつしやるのよ。だから室に新鮮な空氣を入れて置きたいの。窓を開ける事が出来たら、どんなにいゝでせう!

ウキルソン (喫驚して) 窓を開けるんですつて! お嬢様。

エリザベス (溜息をして) さうよ、私はきびしく制トめられてゐる事は知つてゐるけれど……さあ戸をすつかり開けておくれ。

ウキルソン その前に、御嬢様をよくおくるみ致しておきませうね。(毛布を持つて来る)
お客様でございますつて? お嬢様。

エリザベス (ウキルソンが頸の所まで彼女を包んでゐる間に)

さう、従妹のベラ・ヘドレイさんなの。私はあの人の子供の頃から……前掛をかけた、可愛い子供だつた時から……すつと會つて居ないんですよ。それがもう婚約する程大きくなつたなんて。

ウキルソン 左様でございますか、お嬢様。そしてその方は、その若い紳士も御一緒に連れていらつしやるのでございますか。

エリザベス さうよ。

(ウキルソンは戸を開ける)

それから、ロバート・ブラウニングさんも、少し後でいらつしやる筈よ。

ウキルソン まあ、左様でございますか。いつも美しい花束を貴女にお贈りになるあの方でございませぬ?

エリザベス さうよ。(再び本を読み始める)

ウキルソン 風があたつてゐませんでせうね? お嬢様。

エリザベス (見上げないでそのまゝ) えゝ、ちつとも。有難う。

ウキルソン 腕もおくるみになつた方がよろしうございませう? 春風は油断出来ませんからね。

エリザベス (絶望的な調子で獨語) 駄目だわ。私の力以上だわ。止さう。

ウキルソン 何でございますつて?

エリザベス (烈しく呼びかけて) ウキルソン。

ウキルソン はい、お嬢様。

エリザベス (前の様に) お前、何處か今日私に變な所があると思はない?

ウキルソン 變でございますつて? お嬢様。

エリザベス さう。馬鹿の様だとか愚鈍の様だとか云ふ意味の事を云つてるのよ。

ウキルソン まあ! いゝえ。少しぼんやりしていらつしやる様な所が……。けれど御心配なされる様な事ぢやございません。お嬢様。

エリザベス それぢや、お前、私が氣狂になりかけてゐるとは思はないの?

ウキルソン まあ大變な事! 氣狂でございますつて!

エリザベス いゝわ。だけど、さあ、よく聞いて頂戴よ。そしてこの詩がどんな意味だか云つて御覽。

(彼女讀む)

「その後、氣晴らしのため

若し六月が

彌撒の時注ぐ葡萄酒の滴りの如く

うまき、刺なきすべては花瓣に

咲きみだれたる花々をもて輝くならば――

又たけなはに赤く甘美なる一つを選ぶならば――

或は又人と蜘蛛との智慧をもて

新しき網あむ業をとどめん爲めに、

若し六月が

蟲を拂ふ六月の強き稻妻を用ひるならば――

……勿論六月は考へるだらう。」

さあ、如何？

ウキルソン (熱心に) 本當に美しくございますね。お嬢様。

エリザベス けれど之が何の意味だか解るかい？

ウキルソン いゝえ、如何いたしましたか、お嬢様。

エリザベス でも何かお前の心に通じないかい？

ウキルソン いゝえ、お嬢様。

エリザベス (安心した様にほつとして) それや有難い。

ウキルソン けれど詩なんかは決して意味は解りません。少くとも御嬢様のお作りになる様な眞實の詩はさうなのでございます。

エリザベス (笑ひながら) でも之は私が書いたのぢやないよ。ブラウニングさんの詩よ。

ウキルソン あの方はきつと頭のよい方に違ひございませんよ。

エリザベス えゝ、それやさうよ。あの人は全くえらい方よ。

(ウキルソンはフラツシュを抱き上げる)

さあ可愛いフラツシュ。今日はお行儀よくして呉れますか？

(エリザベスは犬の方に兩腕を差し出す。ウキルソン犬を渡す)

ウキルソンが家へ歸つて來たら何をしたかすつかり報告して貰ひませう。

(ウキルソンに) お前はフラツシュを何所へ連れて行くつもり？

ウキルソン さあ、お天氣が大變よろしうございますから、公園を少し散歩させやうと思つて居るのでございますよ。

エリザベス まあ、さう。さうしたら花をよく見て来て頂戴。後でお花の事をすっかり話して貰ひ度いわ。キングサリは勿論散つてしまつたでせう。けれどさんざしの花かチューリップ、それからニホヒアラセイトウが咲いてゐるに違ひないわ。それから多分早咲きの薔薇も……。おゝ、フラツシユ私がウキルソンの代りにお前と一緒に行けたら、持つて居る物を何でも投出して構はないわ。

オクテヴィアス (外で) は、入つてもいい?

エリザベス オキイなの?

(オクテヴィアス入る。エリザベス、ウキルソンにフラツシユを渡す)

一体今頃家で何をしてゐるの?

(ウキルソン、フラツシユを連れて出て行く)

オクテヴィアス お父様の素敵な考さ。お父様が半日休んで小鸚鵡達に餌をやつたり、もてなしたりして姉さんの手助けをしなさいと言つたんだ。

エリザベス (笑ひながら) けど、どうして? ヘンリエタもアラベルもとても社交的な才能を持つてるわ。私だつてさうだわ。

オクテヴィアス けど、姉さん等三人共が皆女性であると云ふ、不、不利益な立場にあるためなんだ

よ。お父様はまあ少くとも、バ、バレット家の男性の一人が居なくてはならないと考へてる様だ。そしてお父様はヘドレイ家の人々を、い、慇懃にもてなさうと全く決めてしまつてゐる様だ。で、お父様が何かしやうと、き、決めたらきつと其通りにする。それとも僕の言ふ事は間違つてるかね?

エリザベス (溜息をつきながら) いゝえ……その通りよ。……けどね、私は貴方がもつと社交上手であつてほしいと思ふわ。サーテイス・クツク大尉はベラやビーヴァンさんと同時に訪ねて来るのよ。大尉はヘンリエタに逢ひに来るの……

オクテヴィアス クツク大尉が、本當? あの慇懃な奴はヘンリエタが四人も附添はれてゐるのを見たら喜ぶだらうな。

エリザベス 私はアラベルにベラとビーヴァンさんを此所へ連れて来て私に逢はして呉れる様に頼んで置いたのよ。お前もその人達と一緒に来なくてはいけないわ。

オクテヴィアス さうかい? 何故だい?

エリザベス 兎に角ヘンリエタが暫くクツク大尉と二人切で居られる様にね。

オクテヴィアス あゝ、あゝ、わかつた。本當にさうだ。姉さんは一寸も自分が悪いと思つてない

ね？

エリザベス ええ。

オクテヴィアス でも姉さん、このめ、芽を出しかけたロマンスに力を入れて、ひどく、わ、悪い結果をヘンリエタに與へるかもしれないと思はないかい？

エリザベス ええ、けれどそれをやつて見なきやならないと思ふわ……。

（彼は訝る様に彼女を見てゐる）

オキイ、昨夜貴方達兄弟六人がお休みなさいを云ひに來た時、或可笑しな考が姉さんの心に浮んで來たのよ。貴方達は一寸も生々してないのね。まるで機械の様よ。

オクテヴィアス 實際！

エリザベス 貴方達は機械の様に毎朝七時半に起き、機械の様に朝御飯を食べ、機械の様に各自の仕事につき、機械の様に家に歸り、機械の様に夕御飯を食べ、機械の様に床に就いてるのね。

オクテヴィアス でも……

エリザベス 貴方達とは違ふけれどアラベルも丁度機械の様ね。貴方達は生活を價值あるものとして呉れる刺戟、冒險、變化、争鬭、兒戲、戀愛と云ふ様な色んなものを生活から切離して終つてゐる様に思へるわ。

オクテヴィアス 僕達は切離しはしないよ、お、お父様がさうするんだ。

エリザベス わかつてるわ、だけど……

オクテヴィアス あゝ、僕達は實際覇氣のないものだと認めるよ。姉さんは如何しろと云ふんだ。僕達皆特別、さ、才能を與へられてないんだ……。そして僕達皆お父様に全然養はれてゐる。それで従はねばならないんだ。従はねばひどい目に逢ふんだものな。姉さんは暴動を、お、起せと云ふんぢやないんだね？

エリザベス ええ……、けど諦めると云ふんでもないわ。貴方達、もつと生々なさいよ。姉さんは貴方達が少しも生活らしくもない生活で満足する様になるかもしれないと心配してゐるの。貴方達はさうなつて行つてゐるのだもの……。貴方達皆がね……、ヘンリエタの他は、

オクテヴィアス ヘンリエタは自分勝手な事をして何の得がある。得より損ばかりしてゐるんだ。エリザベス ええ……、けれど反抗されると云ふ事は人を生々させるわ。だから平和と平穩をもたらす爲めにヘンリエタの小さなロマンスを妨げる様な事はしない様にませうね。例へそれが悲しみになるとしても。

オクテヴィアス それや悲しみになるよ。

エリザベス 悲しむ事はくさつてゐるよりましだから。

オクテヴィアス も、尤もだね……けど姉さんは？

エリザベス 私？

オクテヴィアス うん、姉さん、僕達はまあ若いヘンリエタを除けば皆なるがまゝになつてゐるかもしれない。けれど僕は姉さんだつて反抗する事を大事な事にしていると認めないよ。ところで昨夜のあのボーターの一件は結局どう結末がついたんだい？

エリザベス (物淋しく一寸笑つて) あゝ、でも私は物の數に入らないわ。世の圏外に居るんですもの。貴方達には各々自分達の生活がある。けど私の生活はおしまひなのだから。

オクテヴィアス 馬鹿な事！

(ヘンリエタが入つて来る)

ヘンリエタ まあ、オキイ、あんたは此所で何をしてゐるの？

オクテヴィアス お父様の考さ。お父様は風の便りにサーティース・クックが今日午後うろついている事を知つたので、そ、そいつを追拂ふ爲めに僕を家に歸したんだ。

エリザベス オキイ！

ヘンリエタ (息のとまる程喫驚して) まあ！如何してお父様が知つたのかしら。誰か云はない限り

は……

(エリザベスに) 姉さんかアラベルが……

エリザベス オキイのお馬鹿さん。嘘よヘンリエタ……

オクテヴィアス 失敬。一寸した僕の冗談さ。

ヘンリエタ (怒つて) 私はお前が大嫌ひだ。

オクテヴィアス 尤もさ。

(彼女の肩に手をかけて) もう一度御免と云はう。よかつたら僕を、た、叩いてもいいさ。

ヘンリエタ (少しやはらぐ) 叩いてやりたいわ。とても。

オクテヴィアス (坐つて自分の膝に彼女を引きよせて) いや、ねえ、それはかうなんだ。閣下はだね、自分の代りに僕に接待させ様と僕を家に歸したのさ。僕はベラの傍を離れやしないよ……。たとへばラとベラの許婚がバーを抱擁する爲に此所にやつて来る時にもね。暫く姉さんはクックと楽しい時を過すんだ。ちよ、丁度今僕を楽しましてる様にね。

(彼女に接吻する) 實際、僕達は、ちよ、一寸した下稽古にこんな事をしてるとしてもいいね。

ヘンリエタ (彼の膝から飛上つて) オキイ、お前はどうしてそんなに下品なんでせう。

(彼女はきゝ耳をたてる) あれは何？

(窓の方へかけ寄る) おゝ! お姉様、皆がお見えになつたわ。まあ立派だ事。ビーヴァン家の大きな四輪馬車、盛装した馬丁や皆が。

(オクテヴィアスも窓の所に行き、彼女と共に見下す)

ベラを御覽。何て洋服だらう。何て帽子だらう。まあ可愛い。おゝ、それにビーヴァンさんの髭つたら。(顎の邊りをなでる) オキイ、羨ましくない?

オクテヴィアス 断然羨ましいさ。

ヘンリエタ (オクテヴィアスを戸の方へ押しやりながら)

アラベルがお客様を御迎へするのを手傳ひに行つてらつしやい。早くお行き、早く。私はクツク大尉が来るまで此所で待つてるわ。私はクツク大尉を御迎へする心算よ。それから貴方とアラベルは、ベラとビーヴァンさんを此所に連れて来てもらい、わ。

オクテヴィアス 萬事お膳立は上々だね。

ヘンリエタ 早くお行き! (部屋から彼を押し出して戸を閉める。それから再び窓の所に走つて行つて熱心に通を見下す) 何時?

エリザベス (頬笑みながら) 三時五分過ぎ。

ヘンリエタ 三時過ぎ?

エリザベス えゝ三時過ぎ。

ヘンリエタ 如何したんでせう……。あの人は三時と云つたのに……

(急に心配さうに) バイ、今日は木曜ね?

エリザベス えゝ、さうよ。

ヘンリエタ (ほつとして) あゝあ……

(も一度窓に向つて) 私はあの人が軍服を着て来ればいゝと思ふわ。さうすればビーヴァンさんは自分の髭のカールがのびる程喫驚するでせうに。

(エリザベス笑ふ)

あ、いらつしつやた!! (戸を開放したまゝで部屋から飛出す)

エリザベス 戸を閉めてよ。

(しかしヘンリエタは行つて終ふ。エリザベスは嬉しさうに肩をすくめ、それから本を取り上げ読み始める。暫く後、外に人聲がし、足音が近づいて来る。オクテヴィアス、再び入つて来る)

オクテヴィアス お姉さん、もう連れて来てもらい、?

エリザベス えゝ。オキイ、あの人達どんな風?

オクテヴィアス あゝ、ベラは夢かと疑はれる程の美しさだね。そしてビーヴァン氏は……

(彼は出て行く。間。話聲近づく。ベラ・ヘドレイがぱた／＼と入つて来る。彼女は非常に美しく素晴しく着飾つた小さい女。口達者で、氣取つてゐて、感傷的で、生れつきアールの發音が出来ない。彼女のあとからアラベル、ヘンリー・ビーヴァン氏、オクテイヴァスがついて入る。ビーヴァン氏は外面的にも内面的にも典型的な几張面な態度をしてゐる。彼は素晴らしいクリーガー髭を好み聲や態度はその足の様に美しくまるやかである。)

ベラ (狂喜して) エリザベス!!

エリザベス (手を差しのべて) ベラ……

ベラ パー。

(ソファアの所にひざまづき、エリザベスを抱擁す)

パー、随分お久しぶりね!! けれど可哀さうな／＼パー、何ていた／＼しく變り果てたんでせう。

青ざめて、弱々しく、はかなく……

エリザベス ベラ、これ程迄に美しくなるとは思つてゐなかつたわ。

ベラ おべつか屋さん!(エリザベスの手に接吻し、なほ手を握つたまゝ立ちあがる)

ハアウイ、あんな事云つていらつしやるわ。これは私の親愛なハアウイよ。ビーヴァンさん、この方はエリザベス・パレットさん。

ビーヴァン (おじぎをして) パレットさん、始めまして。お目にかゝれて幸に存じます。

ベラ (片方の空いた手をビーヴァンに差し出す、彼はその手を取る)

いゝえ／＼ハアウイ、貴方はこの人と握手しなくつちや……

(やさしくエリザベスに) こんなに小さい、弱々しい、そして氣高い手を……

ビーヴァン (エリザベスの手を取り、おじぎをして)

そして氣高い……人を感動させる多くの詩を書いたこの手を……。パレットさん光榮に存じます。

エリザベス ありがたう。御目出度うございます……。御二人とも、御幸福である様御祈りしてゐます。

ビーヴァン パレットさん、ありがたう。僕は本當に幸福な男だ。

ベラ ハアウイ……。パー……。

エリザベス お坐りにならない?

(ベラ、アラベル、ビーヴァンは腰かける。オクテイヴァスは窓の傍に立つ)

ベラ パー、私はあなたの詩が大好き……。特にハアウイが読んで呉れる時には。ハアウイは婚約した翌日私に「ゲワルディン夫人の求愛」を読んでくれたわ。彼はとても美しく讀むのよ。そして彼も又あなたの詩が大好き……。この事はきつと貴女を喜ばせるに違ひないわ。何故つてこの人は恐しく目が高いんだから。

ビーヴァン おゝ、よせ／＼何を云ふんだ。

ベラ けどハアウイ、貴方はさうだわ。この人はアルフレッド・テニスの詩でさへ褒めないんですよ。エリザベス 本當？ ビーヴァンさん。

ビーヴァン いゝえ、どういたしましたして、僕は詩としては何も反對してませんよ。テニスはいつも紳士の如く詩を書いて居ます。バレットさん、けれど僕が残念に思ふのは、彼の神聖な事柄に對する態度が往々疑惑的であると云ふ事です。

アラベル まあ、なんて悲しい事……

ビーヴァン アラベルさん、本當に残念な事です。そしてそれが今日の青年の中によくある態度だつて云ふ事は實に悲しむべき事なのです。信仰のない事、謙遜の念の缺けてゐる事、物事を愚弄しやうとする精神……がはびこつて行く様に思はれるんです。勿論、今から云つたつて僕は何もテニスの事を云つてゐるんぢやありませんよ。彼の作品は疑惑的とは云へ常に氣品のあるものです。さて、バレットさん、貴女の詩はこの様な新しい傾向の何所にも觸れてやしません。貴女の詩の中にはベラが讀んでいけない所は一行としてありません。

エリザベス それは——それは本當に満足に思ひますわ。

ベラ ハアウイときたらとても／＼眞面目なのよ。

ビーヴァン こら／＼何を云ふんだ。

オクテヴィアス ビ、ビーヴァンさん、貴方はまだ僕の父にお會ひにならないでせう？

ビーヴァン はい、まだその光榮に浴しません。

オクテヴィアス 君と父はすてきに氣が合ふでせう。

ビーヴァン 本當ですか？

ベラ えゝ、さうよ。何故つてエドワードをぢさんは同じ様に恐しく眞面目だから。お母様は私によ

くさう話して下すつたわ……。けれど二人がきつと一致しない事が一つあるわ。お母様やお父様と

同様エドワード叔父さんも嚴格な獨立新教徒なのよ、ハアウイ。

ビーヴァン (悲しげに) あゝあゝ、本當だ……

エリザベス ではビーヴァンさん、貴方は英國教會の會員でいらつしやるの？

ビーヴァン その通りです、バレットさん。ベラと同じ様に僕は非國教主義の空氣の中に育てられました。けれどオックスフォードはそれを全部變へてしまひました。私の一人の親友はニューマン博士が傳道してゐる、あなたも御存知のセントマリヤ教會の禮拜式に出席する様、そしてピュージイ氏の事業を研究する様にすゝめてくれました……。二年前私は教會員になりました。

アラベル (驚いた様な聲で) ピュージイ……。ピュージイ博士……。けれどビーヴァンさんは……

貴方は……貴方は……

ベラ さうよ。そして私も、私達は二人共オックスフォード・ムーヴメントのグループの者よ。勿論お父様やお母様は最初ひどくそれを悲しんだわ。そして私の信仰の變化が全くヘアウイの感化によるのではないかと心配しました。けれど實際私達は長い間獨立新教に何か缺けてゐるのを感じてゐたのよ……。パー、貴女は何か物足りない所があるとは思はない？ 貴女はそれが自分達の様な階級にふさはしくなく、むしろ低い階級にふさはしい信仰の一つの型であると思はない？

エリザベス (忍び笑ひを一寸してすぐ止め)

いゝえ。私……それがそんなに私の注意を今までにひいたとは云へないわ……けれど……。ベラ結婚式は何時なの？ 教へて頂戴、それともそんな事聞いちや悪いかしら？

ビーヴァン 如何いたしましたしてバレットさん、どういたしましたして。私達は……

ベラ (躍起となつて) おー、それで思ひ出したわ。ヘンリエタは何處へ行つたの？……結婚式？ 八月の初めよ。

(室を見廻して)

ヘンリエタは？

オクテヴィアス 丁度今彼女は階下でお友達をもてなしてゐるよ。

ベラ おー、私はヘンリエタに頼みたい事があるの……。お友達ですつて？ 私達がホールを通いすぎた時居たあの背の高い紳士ぢやないかしら？

エリザベス さう。サーティース・クツク大尉よ。

ベラ おー、陸軍の？ 素晴らしいわ。彼の態度が軍人らしいと思つた。さう？ あの人がヘンリエタのお友達？

エリザベス さうよ……。何かヘンリエタに頼みたい事があるの？

ベラ えゝ。パー、私はあの人に花嫁の侍女になつていたよきたいの。如何思つて？……

(ヘンリエタ入つて来る。彼女はあきらかに放心してゐる。ベラ飛立つ)

ヘンリエタ!!

(彼女の両手を取つて)

可愛いヘンリエタ、今丁度云つた所よ……。貴女は私の侍女にならなければいけないわ。きつとならなければ……。

ヘンリエタ 侍女だつて？ おゝさう——貴女の結婚式で。ベラ、喜んでなつてよ。私にお頼みになつたとは嬉しいわ。勿論私なつてあげるわ……。もしお父様が……、けれどお父様はきつと氣にかけないでせう。

ベラ 氣に懸けるつて？ エドワード叔父さんが？ 氣になんかお懸けになるもんですか。

ヘンリエタ え、萬事うまくいつてよ、きつど。お父様は反對なんか出来やしないわ。

ベラ 反對するつて？ 解らないわ……。パー、この人一寸をかしくない？ 貴女はたゞ侍女になる様に頼まれただけよ。花嫁ぢや、あいませんよ。

ヘンリエタ え、知つてゐるわ……。でも……。お、云ひ表はし難い事……

ビーヴァン (眞面目に力を添へて) 多分バレット氏は侍女と云ふものを結婚式の様な莊嚴な式に於てはくだらない無關係なものと思做していらつしやるんでせう。

ヘンリエタ い、え、え。ビーヴァンさん、さうぢやないのよ。それは……。 (急に口をこらせて)

それは唯、何でも……。何でもこの家ではお父様の許なくしては出来なかつて云ふ事なの。貴方は昔お父様がジャマイカで奴隷を使つてゐた事を御存知でせう。で、奴隷制度が彼處で廢止されたのでお父様は英國でそれを行つてゐるんです。私は至極眞面目なのよ。私達は皆此處では彼の奴隷なのよ。

アラベル ヘンリエタ!!

(ビーヴァンとベラは驚き當惑した様に見える)

ヘンリエタ でも私達さうぢやないかしら？ 私達はさうぢやないかしらオキイ？ 姉様、さうぢや

ないかしら？ 私達はお父様の許がなくては手足も動かす事が出来ないんだわ。私達はお父様の少しの氣まぐれにもそして氣分——(お天氣の様に變り易いんだけれど)——にも従はねばならない。私達は一人として自分自身の魂を持つてないわ。ベラ、お父様が私を貴女の附添にする事を譯もなく、たゞ不機嫌な爲に斷るつて事はありさうな事。い、え事實ある事なのよ。

オクテヴィアス お茶は如何した？

アラベル (急いで立上り) お、さう。さう。

ヘンリエタ お茶はちやんと用意出来てゐるわ。私……。私はずい云ふのを忘れて居たの。ごめんなさい。

オクテヴィアス 何だつて！ ぢや、は、早く行きませう。でないとクツク大尉が皆呑んでしまふだらう。

(ドアの所へ行き、開ける)

ヘンリエタ あの人へ行つてしまつた……

(窓の所へ行き顔をそむけて立つ)

ベラ さよなら、パー。

(エリザベスに接吻する)

お目に懸れて、とても嬉しかつたわ。すぐ又来てほしい？ 今度は私一人ヒトリで来て貴女を独占してよ。ハアウイは連れて来ないつもり。

エリザベス えい、何時でもどうぞ……

ビーヴァン けれど、如何して僕はのけ者にされなきやならないんだい？

ベラ それや、ある傲慢な男の事を山程話したいのですもの……そして、私が云つてゐる事を、その人が聞けば、すぐに自惚れるかもしれないからなの。

ビーヴァン これ／＼何を云ふ。

(ベラ、アラベルの腕を取る、ビーヴァンはエリザベスの手を取り、おじぎをする)
さよなら、パレットさん、

エリザベス さよなら。御親切によくお訪ね下さいました。

ビーヴァン どう致しまして。私は永らく、貴女に御會ひする光榮を待ち望んでゐたのです。では、さよなら。

(ベラはアラベルと腕を組んだまゝで、エリザベスに投げキッスをする)

ベラ エリザベスさよなら。

エリザベス さよなら。

(ベラとアラベル退場)

ビーヴァン (戸の所で振り返り、おじぎをして) 御機嫌よう。

エリザベス さよなら。

(ビーヴァン退場。オクタヴィアス、ビーヴァンの真似をして、戸口で振り返りエリザベスにおじぎをして彼に續く。エリザベスは微笑み、まだ窓の所に顔をそむけて立つてゐるヘンリエタを瞥見して、それから一冊の本を取り読み始める。間。急にヘンリエタは彼女の方に振り向く)

ヘンリエタ (烈しく) ねえ、何故何か云つて呉れないの？

エリザベス (冷く) 私に何を云つてほしいの？

ヘンリエタ 何も……お、お姉さん叱らないで……

(エリザベスの所へ行き、彼女のソファアの横の床に坐る)

私はお叱りを受ける丈の事をしました。私はいけなかつたのです。でも仕方がなかつたの。私はとてもみじめだわ。

エリザベス (口早に) みじめだつて？ ヘンリエタ。

ヘンリエタ えい……そしてとても／＼幸福なの……お姉様、その事についてお話してもいい？ お話したらや悪い事は解てるんだけど……といふのは、若しそれが何とかなつて、お父様ペペが姉さんに、何が起つたか知つてゐるかとお聞きになつたら、姉さんは嘘をおつしやらなきやならないでせう……姉さんの大嫌ひな嘘を……でなければ、お姉様は知つてゐたつて事を認めなければならぬでせう。そしたら、お父様ペペは姉さんがもつと早く注意しなかつたと云つて、姉さんまでもお叱りになるでせう。

エリザベス 心配しないでね、云つて御覽。

ヘンリエタ サーテイスが私に結婚して呉れつて云つたの。

エリザベス おい、ヘンリエタ、でも……

ヘンリエタ それで、勿論私は承諾したわ……そして私は出来ないつて云つたわ。それから、あの人に私達はもう二度と逢つたらいけないつて事云はなきやならなかつたの。明日あの人ペペが此所へやつて來たら、私達は……

エリザベス お前はなんてお馬鹿さんな事を云ふの。本當にどんな事が起つたの？

ヘンリエタ 私知らないの……私達、二人が御互に夢中に愛しあつてると云ふ事の他は……おい、お姉様、私達どうしたらいいんでせう？ サーテイスは自分だけ兎に角やつて行くお金しか持つ

てないし。勿論、私は自分のお金としては、一ペニイも持つて居ないし、若し私が一年に姉さんの四百ポンドのお金さへ持つて居たら、お父様ペペなぞ構はずに家を出て、明日にもサーテイスと結婚するわ。

エリザベス で、そのお金が私にとつてどんな役にたつてせう？ それは貴女にあげるわ。さうすれば如何に楽しく……

ヘンリエタ えい、解つてゐるわ。お姉様がさうして下さる事、でもそれは全然出来ない事よ。もし姉さんが私の結婚の爲に盡して下さつた事を、お父様ペペが御存じになつたら、姉さんの生涯はどんな風になつて行くかと云ふ事を、御考へになつて御覽なさい。いけないわ。でも家族の中で、たゞ一人自由で幸福である様財産を持つた人が、そのお金の使ひ道が無いと云ふのは、とてもひどい皮肉ぢやない？

(急に忙きこんで)お姉様、結婚に對するお父様の態度について何も……全く何も……批評する事は無いかしら？ 男性の愛を一生懸命に求めそして……そして自分の赤ん坊を欲しがると云ふ事が、悪い筈がないわ。

エリザベス えい、けれど、そんな質問に答へる私は、一体如何でせう？ 愛だの、赤ん坊だの私の生活には全く縁のないものよ……

ヘンリエタ えい、わかるわ。お姉様、貴女は普通の方からは、かけ離れた方だから……でも愛とか、赤ん坊とかは私の様な平凡な娘にとつては、あたりまへの事よ。で、さうした自然な事が悪い筈がな

いわ。

エリザベス さうよ。でん、最も聖い人々は、こんな事を拒絶したのよ。
ヘンリエタ さうでせう。でも私は聖い人間ぢやありませんわ。そして、さうした事になれば、お父様も……決してさうぢやないわ。お父様は結婚したぢやありませんか……そして……

(戸を叩く音)

エリザベス お入り。

(ウキルソン入る)

ウキルソン お嬢様、ロバート・ブラウニング様がお見えになりました。

エリザベス (息切れして) あー、あのブラウニングさんが……?

ウキルソン はい、お嬢様。

ヘンリエタ ぢや、私は居ない方がいゝわね。

エリザベス (動揺し、あわてゝ) いゝえ——いゝえ、此所に居て頂戴。あの方にお會ひ出来ないわ、私は……私は會ふ気がしない……お目に懸れないわ。

ヘンリエタ でも、お姉様、一体どうしたの? お姉さんは昨日私にさうおつしやつたぢやないの……エリザベス えゝ、解つてゐるわ。解つてゐるわ、でも本當に私、今あの方に御會ひ出来るなんて思へな

50。

(ウキルソンに向つて)

ブラウニングさんにさう云つて頂戴。残念で御座いますけれど、お目にかゝれる程、気分がすぐれて居りませんからつて。

ヘンリエタ お姉さん、けれどそれは本當ぢやないわ、お姉さんはそんな風にあの方を御歸ししてはいけないわ。あの方に訪ねて下さる様に申し上げておいて、そして色んな努力をして此處へ来て下さつたのに、それでは餘り失禮で不親切すぎるわ。

(ウキルソンに向つて)ブラウニングさんは何處にいらつしやるの?

ウキルソン お嬢様、書齋の方へお通し申して置きました。

エリザベス でも私は……私はあまり……あまり御會ひしたくないわ。

ヘンリエタ まあ、つまらない事を! 世間見ずの女學生ぢやあるまいし、私があの方をお連れして来るわ。ケニヨンさんが、あの方は驚くほどロマンティックな様子で、そしてとてもおめかし屋だつて云つてらしたわ。

(ヘンリエタ出て行く)

エリザベス あの……あの私の髪きれいになつてゝ?

ウキルソン はい、お嬢様。

エリザベス さうく、足掛けふとんをちやんとして頂戴……

(ウキルソン足掛けふとんをきちんとする)

有難う……それからウキルソン……いゝえ……有難う。それで結構……

ウキルソン はい、お嬢様。

(ウキルソン出て行く)

(エリザベスは明かに神経が昂つて、ロバート・ブラウニングの来るのを待つて居る。間。ヘン

リエタ入つて来る)

ヘンリエタ ロバート・ブラウニングさん。

(ロバート・ブラウニング入つて来る。三十五、六の色の淺黒い好男子で、申し分ない、或は幾分酒落たと云つていゝ服装をしてゐる。肩には咽喉の所で紐をくゞつたケープを着てゐる。彼はシルクハットと、レモン色の手袋と、雲模様入のステッキとを持つて居る。ブラウニングの様子は熱誠が籠つて居り、話方は早口で流暢であつて、又自由な身振りでそれを強める。ヘンリエタ出て行く)

ブラウニング (敷居から二三歩の所で少しの間ためらつて)

バレットさん……

エリザベス (手を差しのべて)ブラウニングさん、よくいらつしやいました。

ブラウニング (素早く帽子と手袋とを脇に置き、ソファアの所へやつて来て彼女の手を両手で握り)親愛なるバレットさん……遂に!

(彼女の手を自分の唇の所まで持ち上げて)

遂に!

エリザベス (未だ興奮して、彼の熱情的な、自由な態度に壓倒されて)

私は……私は自分が望んでゐたより、もつと長く貴方に御會ひする喜びを延ばさなければなりませんでした……

ブラウニング (まだ彼女の手を取つた儘)

若し私がこんなにいるさい程云ひ張らなかつたら、貴女は私を迎へて下すつたでせうか?

エリザベス 私の差し上げたお手紙で御存じの様に、冬中ずつと、私はよくありませんでしたから。

そして私……

(彼女の手がなほ彼の手の中間にあるのに気が付いて、靜かに手をぬく)

あの……ケープをおとりになりませんか?

ブラウニング 有難う。

(ケープをぬいで傍らに置く)

エリザベス ブラウニングさん、このお部屋はとても蒸暑いでせう？

ブラウニング いゝえ、決して……

エリザベス お醫者様は私をこんな所に無理に住まはせて……貴方にとっては温室の様な温度ではないかと心配して居る様な所に……

ブラウニング (部屋中を素早く、ぐるつと見廻して) 不思議だ！ バレットさん、貴女は私が此所へ来たのは始めてだと御思ひになるかも知れません。がそれは全く間違つてますよ。

エリザベス でも……

ブラウニング 全く間違ひです。私はこの部屋を何度もくく見ました。この部屋は、私の家にある私自身の小さな書齋同様、私にとつては親しいものなのです。此の室へ入る前に、貴女の書物がどう云ふ風に並べられてあるかと云ふ事、又蔦の蔓がどんな風に窓硝子に絡んでゐるか云ふ事をちゃんと知つて居ました……。そしてホーマーやチョーサーのこれ等の胸像は全くなつかしい友人であり、今まで度々私を見下してゐました……

エリザベス (微笑みながら抗議して) まさか！

ブラウニング でも、私は衣裳箆笥の上の他の人達が誰だつて事は分りませんでした。そして……

エリザベス (笑ひ乍らすつかり落着いて) まあ、ブラウニングさん！ 私は、ケニヨンさんがお友達達の事を、すつかり話すのを、少しも嫌がらない事は知つてゐます。でもあの方が私のつまらない

小さな部屋を貴方に詳しく説明したとは信じられません。

ブラウニング (彼女の側に坐つて) 私は出来るだけ詳しく彼から聞き出しました。そしてあとは私の想像で補ひました。貴女の勇敢な美しい詩を読むと、私は何でも彼でも貴女について知りたくありません。

エリザベス (にくくして) 貴方は私を喫驚させていらつしやる。ブラウニングさん！

ブラウニング 何故？

エリザベス ね、貴方はケニヨンさんの熱心が、どんなにあの人の辯舌をかりたてるかを御存知でせう？ あの方が私とは大の仲好なんです。あの方が私の事について何を貴方に話したか想像しても恥しくなりません。

ブラウニング 貴女は、バレットさん、貴女個人の事を云つていらつしやるんですか？

エリザベス あの人の説明にふさわしく生活しやうと云ふ事は見込のない事だと思ひます。

ブラウニング 彼は何も貴女の事は云ひませんでしたよ……個人的には……。そんな事は私に何の關係もありませんから。

エリザベス (當惑して) あら？

ブラウニング 貴女の生活の状態や環境について彼が話して呉れた事は熱心に聞きました。だが、貴女について彼の言つた事は凡て要點を外れてゐました。何故なら私は既にそれを知つてゐましたし……それにケニヨンさんよりよく知つてゐましたからね……。彼は貴女の舊友かもしれませんが……。エリザベス でも……おゝ、ブラウニングさん。私のつまらない筆は、そんなにすつかり私の事を知らせたくせうか？

ブラウニング すつかり……全く……完全に……私に！ 他の人々に就いては私は云へません。

エリザベス (にこ／＼して) 又私を威すんですね！

ブラウニング いゝえ？

エリザベス でも、貴方は威してらつしやる！ 何故なら、私はいつも貴方とお芝居しやうと試みるのは、本當に無益かと案じます。

ブラウニング 全く無益だ。

エリザベス 私はいつでも、全くありのままの自分でなければならぬんでせう？

ブラウニング いつでも。

エリザベス おゝ……

(口早に) そして貴方も、ブラウニングさん？

ブラウニング いつでも……ありのままの私自身で！

(彼は手を差出す。彼女は微笑し乍らその手を取る。それから急に笑ひ出して)

だけど、本當にバレットさん、其爲めに私は大して賞めて戴けませんね。ありのままの自分であると云ふ事は呼吸をすると同じ位私には容易な事です。芝居なんです、私に出来ない事は……そしてそんなことをした後の難儀と云つたら……！ もし生活を穩かに進めるのなら私達は皆無言役者であればいゝのです。ところで、私は無言で居れない。

エリザベス さうですね。貴方を知つた上はさうだつて事はよく解ります。でもそれは驚歎すべき事ではありませんか？ 貴方がお書きになつてる時貴方はお芝居の他何もしてらつしやいません！

ブラウニング さうなんです……。

エリザベス 貴方は貴方のどの詩に於ても貴方自身ではありませんでした。そこではいつも貴方を通して誰か他の者が語つてゐるのです。

ブラウニング さうです。そして何故だか云ひませうか。私は大變内氣な人間なんです。

(少しの間を置いて口早に)

本當にさうです。

エリザベス (ひそかな楽しみを以て) 私はそれを伺つたものではありません。ブラウニングさん。
 ブラウニング ひどく内氣な者ですから、もし私が私の事、私の希望や恐れ、憎しみ、愛、そうして
 其他の事等書いたら、私の詩が大變下らないものになるだらうと云ふ事をよく知つて居ます。
 エリザベス (笑ひ乍ら快活に) え、私達眞實の他は何も云はないと御約束したのですから、私が
 もつとよく貴方を存じ上げる迄、それを否定致しますまい。

ブラウニング (笑つて) 素敵だ!!

エリザベス (熱心に) お、でもあの喜ばしい高遠な心で生命を肯定するその詩……。それが私
 にどれ丈貴重なものか、とても御解りにはなりませんわ。此の部屋、私は四方、壁に閉ぢ込められ
 ています。ウキンポール街の眺めは唯一の私の世界なんです。ですが、ありと凡ゆる時代、ありと
 凡ゆる國から貴方の詩の中の不思議な人物が、生命、生命、生命と叫び乍ら部屋の中に、私の椅子
 のまはりにやつて來ます。いゝえ、とても貴方には、どれだけ私が貴方の御蔭を蒙つてゐるかつて
 事が、解りつこありませんわ。

ブラウニング (感動して) 貴女は……貴女は本當にさう思つていらつしやるのですか？

エリザベス まあ、どうして……ブラウニングさん。

ブラウニング でも、勿論貴女はさう思つて居るのだ。さうでなければ、そんな事を仰言りはしない
 でせう！そして貴女の仰言つた言葉は、私が世間から受けた凡ゆる冷評を、幾千倍も償ふつて事
 を信じて下さるでせう。

エリザベス (烈しく) お、それはひどい！何故、私達は驚がその翼をひろげて、永久に私達から飛
 去つてしまふ迄、その本体を知る事が出来ないでせう？時々……私は英國の世間が嫌になります。

ブラウニング (軽く) いけない。親愛な舊い英國の社會！少くとも、それは私達に悪口を云
 はせてくれて、楽しい時を寛大に過させて呉れます。でもね、バレットさん、私は私の文体が私の
 不評判に、大變責があるつて、不安を持つてゐるんです。

エリザベス (少し熱心に) まあ、そんな事ありませんわ！

ブラウニング 私達お互にお芝居はしない約束だつたではありませんか？

エリザベス (笑つて) 私の負けだわ！え、多分貴方の作には少し錯……唯ほんの少し普通の讀
 者には意味が深すぎると思ふんです。

ブラウニング いゝえ！それは私の云ふ事じなく、私の云ふ方法なんです。

エリザベス だけど……

ブラウニング しかも、私にはそれは比例の様に簡單で容易です！そして貴女には？

エリザベス さあ……さうとは限りませんの。時々あの……

(本を取り上げる)

貴方の『ソデロ』の中で一つ二つ私には少し解らない所を印して置きました。例へば此處……

(彼女は本を開いて彼に渡す)

ブラウニング (本を取つて) おゝ『ソデロ』! 或人が何時かそれを「大闇黒の恐怖」と云ひました。私はそれを出来るだけ忘れやうとしました。しかし……

(彼は笑ひ乍ら自らその文を読む。微笑は消える。彼は額に手をやつてもう一度それを讀む。彼女はひそかに微笑し乍ら彼を見守つてゐる。彼は呟く)

不思議だ……だけど、ただど文脈からある行が抜かれてゐる……

(彼は立上つて、恰も此の問題、關してもつと光明を得んとするが如く、窓の所へ行く。そして三度目に詩を讀む。エリザベスは可笑さを抑へるのに困つてゐる。彼はおどけた残念さうな表情で、彼女の方を向く)

エリザベス どう?

ブラウニング さあ、バレットさん……あの詩が書かれた時、神様とロバート・ブラウニングだけがそれを理解してゐました。今は神様だけが御解りになつてゐます。

(彼女は笑ふ。そして彼もつり込まれる)

どうしませう? 此の大闇黒を火の上に焼^クて明るくしませうか?

エリザベス (怒つて) いゝえ、いけません! そんな事は決してしませんよ。どうぞその本を返して下さい。

(彼は返す)

こんな詩は太陽の黒點みたいなものです。私は『ソデロ』が好きなんです。

ブラウニング (熱心に) 御好き! 勿論御好きなのです。何故だか云ひませうか? それは大きな失敗だからです。

エリザベス もし失敗といふ事が新しいこゝろみを意味するとおつしやるのでしたら……さうです。貴方のおつしやる通りです! 『ソデロ』が私の心に觸れる理由はそれなんです。私もいつも大きな企をして……いつも失敗してゐます。

ブラウニング 一つの此の様な失敗は、百の小さな成功より價值があるではありませんか?

エリザベス おゝ、千も……もつと!

ブラウニング (熱心に) 貴女もさうお思ひになりますか? 勿論さう思ふつて事、私も知つてゐました。バレットさん、私が既に貴女をよく知つてゐるから、ケニヨンさんが貴女を説明する必要

はなかつたと申し上げた時貴女は笑つたでせう。が貴女がたつた今成功と失敗について仰言つた、事は私が如何に正しかつたかと云ふ事を結局示してゐます。ケニヨン君のした事は背景を埋めただけですが、私は……純真な貴女の魂の……熱烈な美しい貴女の魂の覗いてゐる……肖像を描きました。エリザベス 熱烈なそして美しいつて！ 貴方は私を御存知だと思ひになる！

(悲しい微笑を以て) お、ブラウニングさん……あまりにも短気で反抗的な……

ブラウニング え、それが何ですか？ 私は苦痛の下にある完全な忍耐なんて好きぢやありません。私の肖像畫は一婦人のもので聖者のものではありません。貴女程短気で、反抗的な権利を有してゐる人があるでせうか。

エリザベス ケニヨンさんは私の背景を非常に暗い筆で描きました？

ブラウニング 彼のレムブランド畫伯さへ彼を羨んだでせう！

エリザベス (微笑み乍ら) まあ、お氣の毒ね、ケニヨンさんは、あの人は女皇様より餘程王黨員ですわ。私の不幸が私よりも遙かにあの人を苦しめるつて事は確かですわ……ケニヨンさんは私が……私は死にかゝつてゐる女だつて貴方に話しませんでした？

ブラウニング 私達は皆……死にかけてる。

エリザベス そして私達の家庭生活は手のつけ様もない陰鬱なものだつて云つたでせう？

ブラウニング え、まあさう云つた風の事をほのめかして居ましたよ。

エリザベス ケニヨンさんがそんな事を云ふべきぢやありませんわ、本當に……。ね、ブラウニングさん、貴方は私がそんな哀れむべき女に見えます？ 隠さないで云つて頂戴。

ブラウニング 貴女は私が思つてた通り、元氣に充ちた愉快な方でした。貴方はそんな風に仰言るけれど、私は必ずしもケニヨン君の色の使ひ方があまり暗すぎるとは思ひませんね。

エリザベス でも……

ブラウニング (熱心に遮りながら) まあ、まあ私の云ふ事をお聞きなさい。この繪具はまだすつかり乾いてゐないんです。だから今の中にこそぎ取つて背景全体を描きかへねばなりません……で、もし貴女がお許し下さりさへしたら……私は其素晴らしい仕事に携らして頂かなくつちやなりません。エリザベス でもね、ブラウニングさん……

ブラウニング (話しつゞける) いや終りまで聞いて下さい。私は私の畫筆を朝日の中にでも或は夕日の中にでも或はあの七色の虹の中にでもかまはず突込んで素晴らしい畫を描くつもりです。貴女は私の詩が貴女を慰めたと言言いましたね……だがあんなものは駄目です。今貴女を慰め様とするものは私そのものなのです。とうとう私達は會ふ事が出来たんです……私はもう二度と貴女を離

す様な事はしませんよ。

エリザベス そんな事仰言つても……

ブラウニング まあ、黙つて私の云ふ事を聞いて下さい。さあ貴女の手をかして下さい。

(前に屈んで手を取る)

私は唯一人の男の爲には有餘る生命を持つてゐます……そしてそれは私の体の中で坩堝の様に煮え返り、奔流の様に迸り流れてゐます。今日まで私は自分の想像力により多くの男女を創造して、其有餘る精力を使つて來ました。だのにまだく有餘る力があり、人に與へると云ふより外には使ひ道のないものを持つて居ます。貴女にそれを上げてはいけなうか？ 貴女の指を、貴女の腕を傳つて今、新しい生命が貴女の心臓に鳴り響き、貴女の脳髓を突刺す様にお感じにはなりませんか？

エリザベス (やゝ驚き戰慄して) あゝ、どうぞ、ブラウニングさん、どうぞ手を放して下さい。

(彼は手を放すが彼女は尙しばし手を彼の掌の上に置いたまゝである。やがて彼女は手を引き、その手で頬を掩ひ、大きく見開いた迷つた様な目つきで彼を見る)

ブラウニング (優しく靜かに) どうですか

エリザベス (少し震へてしかし力の籠つた明るさで) 貴方は本當に少し壓倒的な方なのね。そして本當を云へば……私は……

ブラウニング いや私を恐がつてゐるなんてもう二度と仰言らないで下さい。貴女は本當はさうぢやないんです。貴女が恐れてゐるのは生命なんです……が、生命は恐るべきものである筈がありません。

エリザベス 生命ですつて？

ブラウニング えゝ、さうです。

エリザベス では、生命が電撃の連続になつた時には……！

ブラウニング (微笑んで) そんなに強かつたんですか？

エリザベス (笑つて) えゝ、勿論ですわ。貴方はその同じ方法で他の人達を引きつけていらつしやるのですか。

ブラウニング よく人はさう云ひましたよ。

エリザベス (軽く) 貴方にお目にかゝらうかどうしやうかと迷つたのも無理ありませんわ……實はお目にかゝりたかつたんですけど……何でも引つ掻き廻さずには居られない様な貴方の元氣さが、貴方のお手紙や詩を通じて私に傳つたのに違ひありませんわ……貴方はお笑ひになるかも知れませんが、けれど、實は私達は今日お會ひ出来ない所でしたんですよ。ブラウニングさん、貴方がいらつしたと女中が云つて來た時、とても胸がどき／＼して「氣分が悪いからお會ひ出来ない」つてお断りしや

うかと思つた位でしたわ。だから貴方が御部屋に入つてらした時、勇氣を出して正氣の婦人に見える様にと、とても骨を折りました。

ブラウニング あの時私も貴女と同様、とても臆病だつた様に思ひますよ。

エリザベス まあ、ブラウニングさん、貴方が！

ブラウニング さうですよ……けれど概して私は臆病な男どころぢやないのです。でもあの瞬間は私の人生の最高點クライマックスでした……バレットさん、貴女は私が書いた最初の手紙を憶えていらつしやいますか。

エリザベス え、憶えてますわ。とても立派なお手紙でしたわ。

ブラウニング 私が貴女の詩を読んで極端に熱したあまり、あれを贈つたんだと貴女はお思ひになるかも知れません、けれどさうぢや無かつたんですよ。私は一行一句おろそかにしませんでした。そして特にある一行……こう云ふのでした……「私はたまらない程貴女の詩が好きです。又それと同じ様に貴女が好きです」……ね、憶へていらつしやるでせう？

エリザベス (軽く) え……美しく情熱的だと思ひましたわ。

ブラウニング (殆ど怒つた様に) けれどあれには何も感情的なものではなかつたと申したいのです。

あれは私が今迄書いた他の詩と同様に感慨深く思ひながら書いたのです。

エリザベス 貴方の様なよい讀者を澤山もてたら……と思ひますわ。見た事も聞いた事もない立派な

お友達を世界中にもつてゐるかもしれないと思つて見るだけでも素晴らしい事ですわね。

ブラウニング 私は友情の事なんか話してるのぢやありませんよ。戀愛について話してゐるのです。

(エリザベスは笑ひ乍ら云ひ返へさうとする)

いや笑ひや戯談でまぎらさうとなさつても駄目ですよ。私は戀愛と云つたんです……私は戀の話をしてゐるんです。

エリザベス でも……ブラウニングさん。ではお聞きしますが……

ブラウニング (素早く遮つて) 私は氣狂でもなければ病的に感じ易い人間でもない……私は他の人と同様正氣で冷靜な頭をもつて居ます。しかし貴女の詩を始めて讀んで以來……この數ヶ月私は貴女の爲に心を惱されました。今日では貴女は私の生命の中心です。

エリザベス (非常に嚴肅に) もし貴方のおつしやる事を眞面目に聞かねばならないとしたら、ブラウニングさん、それは二人にとつて大變樂しかるべき筈の友情と云ふものゝ終末を早めるに違ひありませんわ。

ブラウニング どうして？

エリザベス 貴方が仰言つた意味では、明かに戀愛なんでものは私の生活の中にその存在の場所も持つて居りませんし、又持つ事も出来ないんです。

ブラウニング 何故？

エリザベス それは色々な譯があつて……でもこれだけ申し上げて置けば十分でせう。前にもお話をした様に……私は死にかゝつてゐる女なんでももの。

ブラウニング (情熱的に) そんな事を信じてはいけなさと云つたではありませんか。何故つてもそれが本當だとしたら神様は無情な方にきまつてゐます。けれど神様はお情け深いお方でありまして、そして人生は辛く苦しいものですが、さうでなく良いものだと言ふ事を私は知つて居ります。貴女は二度とそんな事を口にしてはいけませんよ。私は貴女にそれを命じます。

エリザベス 命令なさるんですつて？

ブラウニング さうです。おやめなさいと命令するんです。もし私が貴女について感じるまゝを貴女に話してはいけないと貴女が私に命令し、私がそれを守らねばならぬものとしたならば、同様に一寸した私の命令も聞かれても良い筈だつていふ事になるではありませんか？

エリザベス それはさうですね。でも……

ブラウニング (急に晴々と笑つて) ね、バレットさん、私達の友情は素晴らしい始り方をしていますね。私達はほんの半時間しかお互に話しませんでした。だのに藝術や人生や死や戀愛について親しく語り合ひました。その上お互に命令をし合ひ、喧嘩もする所でした。これ以上に幸福な未來を約束さ

れた友情が又とありませうか。貴女がおよろしければ、私はもうこれでお暇いたしませう。ケニョン君がはじめての訪問客は病人を疲らすから出来るだけ早く歸る様に、と口を酔くして云つて呉れましたよ……私はお客様ぢやないつもりですけど、貴女も大分お疲れになつた様ですから……、この次は何日お訪ねしたら良いでせうか？

エリザベス (少し困つて) そんな事はつきり解りませんわ。私……

ブラウニング 次の水曜日では如何でせう？

エリザベス (前と同様に) えゝ多分良いと思ひますわ……でも……あの……

ブラウニング では次の水曜日に。

エリザベス けれどね……

ブラウニング では、又三時半にしませうか。

エリザベス えゝ……でも私……

ブラウニング (彼女の手に接吻して) では、その時に又お目にかゝりませう。

エリザベス さよなら。

ブラウニング (優しく誇らかに、彼女の手を取つたまゝ) では又お目にかゝりませう。

エリザベス (一寸間を置いて息を呑んだ様に) えゝ、では又……

ブラウニング ありがとう！

(彼は彼女の手に接吻して、踵を返して帽子とケープを取り、出て行く。戸が閉まるや否や、エリザベスは起き上り手で顔を掩ふ。次に静かにソファから下り、危つかしげに立ち上り、テーブルや椅子をつかんで部屋を横切り、窓邊による。カーテンをつかんで身を支へ、今別れた彼の姿を見送る。彼女の顔は若い娘の様に喜、びと興奮の爲に生き／＼と輝いてゐる)——静かに幕——

第三幕

——ロバート——

約三ヶ月後。

チエンバース博士は煖爐の傍に立つて居る。フォード・ウオーターロー博士はソファアに腰をか
けて居る。嶮しい顔付の、口の悪い老人である。兩博士は、エリザベスがしつかりした確かな足
取で部屋の向ふの窓邊迄行つて、又歸つて來るのを熱心に見て居る。フラツシユはソファアの上
に寝て居る。

フォード も一度どうぞ。

(エリザベスは再び部屋の中を歩く)

お嬢様、お目出度うございます。ではお掛け下さい。(彼女は彼の傍に掛ける。彼は話しながら脈
をみる) 此前僕を診察にお呼びになつたのは丁度何時でしたか、チエンバース君。

チエンバース 丁度三月前です。

フォード さうく、そして君の患者は其の時非常に嶮悪な容態でしたね。君、本當に偉い事をやつ
たよ。

チエンバース いや、僕は只普通に注意深く努力した丈です。正直に云へば、名譽は僕が受けるべき

ぢやありません。

フォード 何？

チエンバース 實際の醫師は他人ではない、お嬢様御自身です。

エリザベス でも先生……

チエンバース 本當ですよ、お嬢様、本當ですよ。三月前には貴女は生命と世界から少なからず逃れ様としていらつしやる様に思はれました。私の云ふ事を聞いて下さい。私は一心に貴女を見守つて居ました。生命と世界は次第々に貴女に価値あるものになりました。生きたいと云ふ希望は幾人の醫師にも勝るものです。此の事は私の此のすぐれた友も認めるだらうと思ひます。

フォード 生きたい希望……さうです……そして貴女は此の頃は時々方々お歩きになる事も散歩する事もお出来になりますね。

エリザベス え、先生、數人の友達を訪問致しましたし、數回公園のまわりを楽しくドライブ致しました。只一つ厄介な事は階段を上下する事でございます。下る時には氣が遠くなりさうになります。そしてまだ上る事は出来ません。

フォード さうでございませうとも、さうでございませうとも。

チエンバース (にこくししながら) 幸に餘り強い人でなくても、貴女をかゝえる事が出来ます。

エリザベス けれども其處が先生の考へ違ひしていらつしやる所でございます。(フォードに) 私がどんなに肥つて来たか、とても御想像がつきませんわ。

フォード 本當にさうですか。

チエンバース (嚴かに) ですから私はお嬢様がとても好きな飲物、あのポーターを減らす事ばかり考へて居た位です。

エリザベス (笑ひながら) その事をおつしやつて恥かしくお思ひにならないのか知らん、チエンバース先生は。

フォード ところで、今後の事ですがね、お嬢様、チエンバース君と同じ様に私も、もし出来る事なら、此の冬をロンドンでお過しにならない方が良いと思ひますよ。今の様にだん／＼元氣が出て居られるのでしたら、十月迄に南方へ旅行されても差支へないと思ひますが……

エリザベス (あせる心を殆どかくしきれず) 旅行ですつて……南方へ……

フォード リヴィエラか、或ひはイタリーならなほ結構ですな……

エリザベス (息を切らして) イタリーへ！ お、先生、本當にさうお思ひになりました？

しやりたいと云ふ事や、又イタリアへおいでになるのに何ら……えー……實際上の困難がない様に伺つたと思ひますが……

エリザベス 實際上とおつしやいますのが経済上の事でございますなら、心配は要りません。私、わすかながら自分の収入がありますから。そして……

フォード 成程……

チエンバース 外國で冬を過されるについて、只一つ本當にお困りになる事を失禮ながらフォード・ウオーターロー君に話しました。それでフォード君は、その方に談判する心準備が出来て居られます。

フォード 全く其の通り、しかも厳しく。

エリザベス (口早に) けど、そんな事は決して必要ありません、お父様は決して反対なさらないでせう。その時のお父様の氣持によります。そして……

フォード 馬鹿らしい。お嬢さん、お父様の感情は全く別問題です。私がお父様にはつきりお話しやうとして居る通り、問題はすべてお嬢様の御健康と御幸福とにあるのです。其は極めて明瞭です。

エリザベス お父様が親切と寛大そのものでないとお考へになつてはいけません。男の方は癪癪持なのです。イタリアー！ お、イタリアーへ行けるかも知れないと思ふさへ許されない事です。先生、私

のあこがれの地、それは夢の他には見る事が出来るとは思ひませんでした。

フォード (立ち上りながら) さうです。現實が幻滅をもたらさない様に望みませう。私の考へでは、その國を餘り買被りすぎられてゐますよ。只塵埃や蠅や異臭や乞食だけです。さよならお嬢さん、どうぞお立ちにならないで……(彼女の手をとる)本當によくなられて嬉しいです。さあ、これから少しお父様とお話して來ませう。さよなら。

エリザベス さよなら、先生。

チエンバース さよなら、エリザベスさん。

エリザベス さよなら。

(兩醫師退場)

(エリザベス自分の兩頬をおさへて私語する)

イタリアー、イタリアー、イタリアー、(フラツシユを抱き上げる)

フラツシユ、お前も一緒につれてつてやらう。一緒にローマも、フロレンスも、ヴェニスも、ヴェスヴィアスも見やう。

(アラベル登場。エリザベスはフラツシユをおろして立ち上る)

アラベル！ (強くアラベルを抱きながら) 殆どきまつてよ、イタリアーへ行くの。先生は十月迄には

旅行出来る丈の健康状態になるとおつしやつたの。ローマ、フロレンス、ヴェニス！ ヴェスヴィ
 アス！ ラファエル！ ダンテ！ ソデロ！ あゝ私は何を云つてるのでせう……気が變になつて
 るわ。

アラベル まあ何て素晴らしいのでせう。嬉しいわ。それでお父様お許しになると思つて？

エリザベス 勿論許して下さるでせう。二人の先生は出来る丈熱心にお父様に話して下さる事になつ
 てるの。えゝ、お父様は今度のイタリー行きが私にとつて、どんなに重大だかおわかりになれば、
 決して反対なさる様な無情な方ぢやないわ。

アラベル (信じないで) さうよく。

エリザベス お晝からお父様を見て？

アラベル えゝ。

エリザベス (口早に) どんなんだつた？

アラベル (熱心に) 御機嫌うるはしくてよ。私を、プスとお呼びになつたの。御機嫌が悪いと決し
 てさうは呼んで下さらないんですもの。ベラが来てからは本當に嬉しさうだつたわ。

エリザベス まあ有難い！

アラベル 其で思ひ出したわ、お姉様、ベラがね、ヘンリエタが花嫁の侍女になる時に着る衣裳を持

つて來たの。皆はお姉様に見ていただきたくないのですつて。今着て見てる所なんですけど……

エリザベス 喜んで見るわ。(呼鈴のひもを引く) お父様が決定なさるまで気がかりで仕方がないから、

何か氣晴しをするものがほしいの……

アラベル お姉様、何だか此のイタリー行きプランの計畫をお父様にかくして置いて、急に云ひ出すのは一
 寸下手だつた様に思はれてよ。

エリザベス えゝ、私もさう思ふけどね……

(戸を叩く音)

お入り。

(ウキルソン登場)

ヘドレイさんとヘンリエタに、今いらつしやいと云つて頂戴、

ウキルソン はい、かしこまりました。

エリザベス 其からついでにフラツシュを出して、人が五六人部屋に居ると怖がるから。

(ウキルソン、フラツシュを抱き上げ共に退場)

二人の先生が旅行してもいゝとおつしやるまでお父様に何も云はない様にとチェンバースが仰言つ
 たの。その時は私もさう思つたけど、今になるとね、アラベル、心配だわ。

お父様が……

(外で話し聲や、笑ひ聲が聞える)

あの人達には此の事について何も言はないでね。

(アラベルちなづく)

ベラ (外で) 入つてもよくつて?

エリザベス (立ち上りつゝ) どうぞ。

(ベラは花嫁の侍女の衣裳をつけた恥かしさうではあるが、嬉しさうなヘンリエタと一緒にとんで入つて来る)

ベラ。

ベラ (エリザベスを抱擁しながら) まあ、エリザベスさん、エリザベスさん。私の様な者を迎へて下さるのに立上る事なんかありませんわ。

アラベル (ヘンリエタをつくつく眺めながら) まあ、何て美しい事。

エリザベス 美しい事。

ベラ ねえ、素敵でせう。ヘンリエタさんは。ヘンリエタさんは私の侍女の中できつと一番美しいでせうよ。ヘンリエタさんの方が花嫁の私よりも、皆の眼を引かなきやいと氣がかいよ。と

もかく、紳士達の眼をね……パー、貴女そんなに立つて居てはいけませんわ。

(エリザベスをソファアに導く)

エリザベス でも私は、今では、他の人の様にちやんと立つてる事が出来るの。

ベラ (エリザベスをソファアの上に横たはらせながら) いゝえ、あなたの透明な靈的な美しい顔を見ただけで、どんなに天國の近くへいつて居るかつて事が解けますわ。あなたの眼はね、エリザベス、何時も、もう天使が見える様に見えてよ。

ヘンリエタ お姉様は私を見てるのよ。ベラ……私は天使ぢやないわ。

ベラ え、ヘンリエタは天使ぢやないと思ふわ。でも、とても美しいわ……パー、もしエドワード叔父さんに私が直接お話しなかつたら、ヘンリエタに侍女になつてもらへなかつた所ね。

エリザベス さうよ、ベラ、ベラは獨特の戦法があるわ。

ヘンリエタ お父様にお話した所、とても見物でしたわ。でもベラはお父様の膝の上に座つて、頬髭を撫でてたわね。

アラベル (叱る様に) まあ、ヘンリエタちゃん。

(エリザベス笑ふ)

ベラ 何故いけない? 私の叔父さんぢやないの……其上、叔父さんは非常にいゝ方だと思ふわ。

あんな厳格な、陰気なタイプの男の方、私尊敬するの。あゝ云ふ方の御機嫌を取つたり、賺したりする事はとても面白いわ。そして又容易いわ……やり方さへ知つて居れば……私は本當に知つてると思ふの。でも私、解らないのは叔父さんの戀愛とか、結婚とか云ふ様な事に對する突飛な態度なんです。叔父さんが幾分あの……そのう……あの……女……あの女何とか云つたわね……

エリザベス 女嫌ひ？

ベラ あゝさうく。そして……

ヘンリエタ えゝ、女嫌ひの大將とでも云つていいと思ふわ。

ベラ でも、眞當はさうぢやなくてよ。

ヘンリエタ どうしてそんな事云へて？

ベラ いゝわ。私には解つてよ。其れに叔父さん御自身も結婚なさつたでせう。その上、十一人もの子供があるぢやないの？

(不愉快な沈黙)

何かお氣にさわる様な事を云つたかしら……

アラベル いゝえ、さうでもないけど、餘りいゝ事ぢやないかも知れないわ。神様が私達に子供をお授け下さるのに、どうしてとか、何故だとか云ふものではなくてよ。

ベラ ごめんなさい。不敬な積いぢやなかつたんです……けど、エドワード叔父さんの態度は確かに突飛だと思ふわ……で無駄だわ。何故つて、其れにも拘らず叔父さんの眼の前であるのに……何も知つていらつしやらないけど……家中がまあ、ロマンスで沸きかへつて居るのですもの。

アラベル ベラ！

ヘンリエタ (強く) 一體全體、何を云つてるの？

ベラ わかるはずよ、ヘンリエタ。

ヘンリエタ 私が？

ベラ (熱心に) サーティイス・クツク大尉は本當に身震ひする程いゝ方ね。あの方が貴女を見る時のあの眼付と云つたら……もし私だつたら、あんな眼付をされたら、立つて居られない程足が震へ、背中の方に何とも云へない感じがするでせう。

アラベル 本當にまあ、ベラと云つたら……

ヘンリエタ (困つて當惑して) あなたの様にわづかの間になんな馬鹿げた事考へる人、見た事ないわ。

ベラ 見た事がないの？ それから、ジョーヂが居るぢやないの。信じないかも知らないけど、確かに彼はあの小さい従妹のリジーに對して非常な理解力を持つてるわ。其れなのに、あなたはチャー

ルスとあの人……何と云ふ名でしたつけ……とは只の友達だと云ふ積りなの？ 其れにあの可哀相なオキイさんの事ね……内證で言ふけど、ひどくやいてるの。

アラベル ビーヴアンさんがオキイをやくのですつて？ 其れは又、何故なんでせう。

ベラ 何故つて？ 男の人達つて、お馬鹿さんではなくつて？

エリザベス (笑ひながら) まあ、ベラ、何てあなたは變つた人なんでせう。

ベラ 私ね、小さい事に非常に観察力があるのよ。例へば、あなた方は殆ど名前さへ口に出さないけれど、ロバート・ブラウニングさんが少くとも週に一回はあなたに會ひに此處へ来る事知つてるわ。でなければあなたに花束を送つて来る事も、それから、フラツシユによくお菓子を持つて来る事も、フラツシユが口がきけたら、どんなに面白いでせうね。

アラベル おやまあ、なぜ？

エリザベス (冷く) けれど、ベラが時々だまりつこくなつた時の様には面白くありませんわ。

ベラ おこつて？ エリザベス、私とてもお喋いだつて事は知つてますわ。でも、あなたをからかつても本當にお氣にさわらないでせう。

エリザベス え、ちつとも。

ベラ (アラベルに) ねえ、フラツシユはイギリス第一の美青年詩人がバーの部屋で毎週一度つゝ、

忍び會ひをする時の證人なのよ。フラツシユはもう今ぢや、随分よく詩の事については知つてるはづだわ。何故つて、二人の詩人がよつたら、詩や韻律の事についてしよつちゆう話し合つて居るのぢやなくつて？ さうぢやない？ よくは知らないけど……

エリザベス いや、決して、其れどころか、ベラ、あんたとても物知りだわ。

ベラ あたしが？

ヘンリエタ お父様の前でこんな突飛な下らない事を喋らない様にして頂戴ね。

ベラ 之が下らないことつて？ 恐れながら、あたしだつて其れについては意見があるわ。でも、エドワード叔父さんには一口だつて喋いはしませんよ。私はローマンスや、本當の愛や、其他其の様な物の味方よ。

アラベル (眞面目に) ベラ！ 言ひたくない事だけど、貴女は私の知つてる人の中で父から躰けてもらふといゝ人だわ。本當に。

(エリザベスとヘンリエタ笑ふ)

ベラ まあ、随分痛快な考へね。叔父さんは何時も非常に厳格な様でしたわね。お行儀が悪かつたらむちでお打ちになつて？ エドワード叔父さんにたゝかれたらどんなに面白いでせう。

(戸を叩く音、バレット姉妹直に緊張)

エリザベス お入り。

(バレットが入つて来る。ベラ小さな叫び聲を上げて不意に立上り彼の所へとんで行く)

ベラ まあ、エドワード叔父さん、(手を叔父の腕にかけて寄りそふ) ねえ、叔父さん、もしあたしがお父さんの娘ぢやなくて、叔父さんの娘だとしたら、殿しくなさいます？ なさらないでせう？ ねえ、其とらなざる？

バレット する？ せぬ？ せぬ？ するつて？ お前はつまらん謎をかけて儂を質問攻めにしやうとするのかな？

ベラ (部屋の中へひつぱり込んで) いゝえ、いゝえ、いゝえ、お坐りになつたら？ (彼を椅子へ押しやり膝につかまつて) 其はこうなんです。だけどエドワード叔父さん、なぜ額に八の字をよせていらつしやるんでせう。(彼の額を軽く指でなでる) それ御覽なさい。皆なくなつちやつた。(バレット氏、腕でそつとベラの腰のまほりを抱く) アラベルはあたしが叔父さんに育てられたら一番よかつたのに、と言つてますよ。アラベルは、あたしが甘えん坊で、馬鹿な、やんちや娘と思つてるの。そして……

アラベル ベラ！ 私そんな事言はなかつたわ。

ベラ えゝ、知つてるわ。でもあなたはさう言ひさうね。(ヘンリエタとエリザベスを指して) あな

たもあなたも、だけど、叔父さんはおつしやらないわね。

アラベル まあ、ベラ。

バレット (ベラに話しながら皆の方を向いて) 儂の子供達が、お前の様に快活で、あつさりして居て、優しかつたら、儂はもつと幸福になるのになあ。

ベラ そんな事言つちやいけなわ。でないと、あたし憎まれますわ。

バレット (彼女を引き寄せる。二人は他の者達の存在を忘れて) そしてお前は氣が狂ひさうに可愛いねえ。

ベラ いけませんか？

バレット さうは言はなかつたぢやないか……

ベラ では何故叔父さんは、私をそんなに恐ろしい顔をして御覽になるの？ あたしを食べてしまふ

おつもり？

バレット お前がつけて居る香水は何かね？

ベラ 香水？ あたしがつけてる？ (くすくす笑つて彼の所へすり寄り) お嫌ひ？

バレット 概して儂は香水が嫌ひぢやが、お前のは特別ぢや。

ベラ 好い香ひがしますか。

バレット 餘り強くもなく、かすかにしか香はぬ。けれど其をつけてない方がいゝと僕は思ふよ。
ベラ なぜ？

バレット いゝよ／＼。(そつとベラの腿をうつ)

ベラ あゝ、いたい……

バレット ばかな。

ベラ (ほこらしげに) でもあたしは香水を使はないの。一滴だつてつけては居ないのよ。香水なんて嫌なの、つまらないものだと思ふの。(彼の首へ腕をまきつけて) 叔父さん、あなたはいゝ方ね。あなたは今さつき私の事を快活で、あつさりして居て、やさしくて、氣が狂ひさうに可愛いつて、そして又とてもいゝ香がするつてほめて下さつたわね。接吻して下さつていゝわ。

(バレット氏荒々しく二度程接吻する。ベラは低く聲を立てる。其れから彼は膝からベラを押しつけて歩き出す。ベラは少々驚いて見て居る)

バレット (無雜作に) さあ／＼、ベラ、向ふへお行き。僕はバーに話がある。(他の者達へ) お前達、あつちへ行け。

(窓の方へ行き部屋に背を向けて外をながめながら立つ)

ベラ (やゝむつとした聲で) 叔父さん、さよなら。

バレット (振向きもせず) さよなら。

ベラ さよなら、バー。

(頭を軽く下げて退場)

エリザベス さよなら。

(ヘンリエタとアラベル退場、無言の一時、エリザベスは部屋を背にして窓邊に立つて居る父をいら／＼しながら眺めて居る)

バレット (振りかへらず) 結婚は何時ぢや？

エリザベス 結婚？ あゝベラのね。廿七日でせう。

バレット (振りかへつて、半ば獨言の様に) よし。二週間もないな。其迄餘りあれには會ふ事もあるまひ。其後は……あれは殆ど一年中田舎に居るだらう。

エリザベス だけどお父様、あなたはベラをとて愛していらつしやると思つてましたが……

バレット (きつく) 愛して居るだらうつて？ 何故悪いんだ？ あれは僕の姪ぢやないか……だが彼女は家の中では波瀾の種ぢや。お前の弟達、特にオクテヴィアスが……ふつ……彼女を追つて居るあいつらの眼を見ると……部屋の中はあれの事で一杯ぢや、僕は彼女が行つてしまへば嬉しい。が僕はベラの事は言ひたくない。醫師達は今歸つたとこだ。

エリザベス (豫期した様に) え、そして……

バレット (無理に眞心こめた様に) 醫者達の報告はすばらしい。驚く程だ。僕は非常に満足に思ふ。僕は嬉しい……勿論お前が普通の女になれる事は無理だ。樂天主義のチエンバース博士ですら、之を認めずには居られないのだ。其れは兎も角、あのフォード・ウォーターロー博士は何者ぢや！

エリザベス ロンドンの名醫の一人だと聞いて居ます。

バレット さうか。うん、あいつは自分の實にひどい行ひの埋め合せに驚く程の力が必要なんぢや。此の名醫ですら、お前の健康の急によくなつた理由を説明し得ないんだ。途方もないたはことだがチエンバースの力に依るのだと云つてる。

エリザベス 多分私の健康は今迄の良い氣候に依る所があるのでせう。私は何時も暖い時や、日光が良くあたるといふのですもの。

バレット 馬鹿な。去年の夏は蒸し暑かつたが、お前はあの時程悪かつた事はないぢやないか。いや、僕の思ふには、あの何とか言つたなあ……あの醫者のやつ、僕がさう言つたらあざ笑つたが、僕達が感謝せねばならぬお方がいらつしやるのぢや。

エリザベス どなたでせう？

バレット 僕は全能の神の事を言つとる。エリザベス、此の回復の奇蹟を受けたお前が、只これが

此の地上の働のせいだと思つてるとは驚いたよ。僕は毎晩々々、此處に跪いて凡ての物を愛し給ふ天の父上に、其の子の上に憐みを下し給ふ様に切願したではないか……驚いたよ。言ふに言はれぬ程、僕はたさけない。今のところ、僕の言ふ事は其れだけだ。(出口の方へ向く)

エリザベス お父様。

バレット 何だい。

エリザベス フォード・ウォーターロー先生は此の冬の事に就て何かお話なさいませんか？

バレット フォード・ウォーターロー先生は、まあ言はばナンセンスばかり言つてた。(彼は出て行くとする)

エリザベス でもお父様……

バレット (じれつたさうに) 何だ？

エリザベス 先生は此の冬イギリスで過さない方がいゝとおつしやらなかつて？

バレット それで……

エリザベス そして十月にはイタリーへ旅行する事が出来るだらうと思ふと言つてられませんでして？

バレット さうか。たう／＼言ふたな、そして何時から此の大切な計畫プランがたくらまれて居たのか。

エリザベス チエンバース先生が實際見込みがあるとして、最初にイタリーの事を言はれたのは數週間の事です。

バレット 解つた。さうして弟や妹達は此の嬉しい計畫プランの事を知つてるのか。

エリザベス 妹弟達には言つたと思ひますが。

バレット さうか。そしてケニヨン氏やホーン氏や、其れからヘドレイや、あの法螺吹きブラウニング等……要するにお前の友人達と親類皆とお前は相談したんだらう。

エリザベス お父様、そんな事構はないぢやありませんか、私の唯一の理由は……

バレット 構ふ？ 少しも構はん。儂一人が儂の一番愛してる娘に裏切られ、くだらん人間の様に扱はれ、無視され、侮辱されると言ふ事は何でもないのでや。

エリザベス 侮辱？

バレット 大いに侮辱だ。あのフォード・ウオーターローのやつが、お前のちやんと出来上つた計畫プランを儂にぶちつけたので、儂は自然驚きと不賛成をとなへたら、彼は非常に怒つた。

エリザベス お父様、私を信じて下さい。もつと前に、此のイタリー行きの事を貴方にお話しなかつた一つの理由は……

バレット 儂が其れを雷の中に摘み切つてしまふと言ふ恐れだらう。さうに違ひない。儂はよく解

つとる。

エリザベス でも……

バレット いかん、もう説明も、申譯もしないでくれ。此の不愉快な問題は全く明かだ。儂の子供の中で、全く信用しきつてたお前だ……そのお前がこんな隠険な事をするなんて……儂は腸を断キられる思ひがする。

エリザベス さうぢやありません。さうぢやありません。

バレット もし健康の回復がこんな悲しい結果を來すなら、お前がもう一度動けないでソファアの上に横たはつて居る方が好いと思はざるを得ない。もうこれ以上言ふ事はない。

(彼はドアの方へ行く)

エリザベス (怒を制しつゝ) もつと申さねばならぬ事があります。お父様、聞いて戴かなければなりません。何年間私は此處に寝て居たのでせうか？ 五年でしたかしら……六年でしたかしら……一年が十年の様でしたから思ひ出せません。其の間ずつと、死と云ふ事の外に何も楽しみにする事も、望みもなかつたのです。只死のみでした。

バレット 死？

エリザベス えゝ、死です。私も幸福になれる資格を十分持つて生れて來ました。若い少女の私を覺

えていらつしやるでせう。それなのに私の生活が私にわづかの幸福と大きな苦しみをもたらした時、度々死ぬことが待ち切れなかつた程です。

バレット (ひどく怒つて) エリザベス。あきれれるよ……お前は……

エリザベス (早口に) その後で此の奇蹟が起つたのです。だん／＼私は他の人達のように友達に會つたり、外の空気を吸つたり、太陽にあたつたり、大空の下で咲いてる草や花を見たりする様な楽しい事が出来る様になつて來たのです。チェンバース先生が最初にイタリーの事をお話しになつた時、私は其の考へを押しのけました。餘り素敵すぎる様に思つたから。けど私がだん／＼よくなるにつれて、意外にもイタリー行きは少しも不可能でない様になつてきたのです。私が行つても何もさしつかへがないし、又行く権利を持つてゐる様に……

バレット 権利？

エリザベス え、あらゆる権利を……もしお父様が承諾さへして下さるなら。で私は友達と相談をし初めました。總ての障害物を調べて、細々した事を定めて先生達がお父様に意見を述べられてから、ちやんと出來上つた計畫をお話出来る様にしました。夢中になりすぎて無分別なまねをしたかも知れませんが。けれど私のした事を隠険だとか、不誠實だとか言ふのはあんまりですわ。其はひど過ぎますわ。

バレット (怒ると云ふより悲しさうに) 自己、自己、自己、自己の爲のみだ、他人の事は何も考へなければ、思ひやりもしない。只、自己の楽しみばかりだ。

エリザベス (烈しく) でも、お父様……

バレット (だまる様。身振りをして) イタリーでお前が楽しく暮さうとする長い月日の間、お前の父は全く一人ぼつちで此處に残ると云ふ事に一寸でも氣が付かなかつたか。

エリザベス 一人ぼつち？

バレット 全く一人ぼつちだ。儂にとつては、お前の弟妹達と一緒に居る事は反つて陰鬱な事だ。そしてお前、エリザベス、お前がよくなり、最早儂に頼らなくてもよくなつたので、お父様からそろ／＼離れて行かうとしてゐる事に儂は氣付かないと思ふのか。

エリザベス そんな事ありません！

バレット いや、さうだ。お前は自分でさうだと言ふ事を知つてゐるくせに。

エリザベス 違ひます。

バレット 新しい生活、新しい興味、新しい喜び、新しい友達、そしてだん／＼儂は除者にされてるのだ。お前の總てであつた儂、お前を愛する儂、お前を愛して居る儂は……

エリザベス お父様……

バレット (だまる様、身振りをして) いや、もう言ふ事はない。(彼は窓の方へ行き、外を見て其れから振り返る) お前はイタリー遊覽の承諾を待つてるのだな。僕は許しませんが、其れを止めもせん。許す事は自慾と我儘とをさせる事になり、僕の心は其れを許さん。止める事は無駄だ。お前は
お前の自由が出来る。たとへ、僕がお前の旅費を出さぬと言つても、お前は望みを果せるだけ財産を持つて居る。お前はしたい様にするがいい……もし旅に出るなら、時々僕の事も考へてくれ。曾ては愛する者の居た此の部屋に、夜靜かに這入つて来る僕の事を思つてくれ、誰も居ないソファに傍に唯一人跪いて、善き天の羊飼に懇願して居る僕の事を思つてくれ。

(戸を叩く音)

エー?

エリザベス (驚いて胸に手を當てる) あゝ……

バレット (うるささうに) 誰だ? 入れ。

(ウキルソン登場)

ウキルソン ごめんあそばさ、ブラウニング様がいらつしやいました。

バレット (小聲で) 又あいつか。

ウキルソン お嬢様、ブラウニング様を客間に御案内いたしました。お手があいていらつしやらない

と存じて居りましたので……

エリザベス ブラウニングさんにお會ひになりませんか、お父様。

バレット 會ふもんか、僕は決して子供達の友達にわづらはされない事を、もうお前は知つて居る筈だ。(ウキルソンに向つて) ブラウニングさんを二階に案内しろ。

ウキルソン 承知いたしました。

(ウキルソン退場)

バレット ブラウニングは此處を第二の家と思つてでも居る様だ。

エリザベス 私は先週の水曜日以來お會ひしてませんわ。

バレット 成程。

(バレット退場、エリザベスはじつと靜に座つてる。息をはずませて戸を見つめつゝ。ウキルソン登場)

ウキルソン ブラウニング様でございます。

(ブラウニング登場。エリザベス彼を迎へる爲に立ち上る。ウキルソン退場)

ブラウニング (彼女の手を取りつゝ) おゝ、何てすばらしい事だ。あなたが立つて迎へて下さるのは四邊目ですわ。

エリザベス (すつかり様子が變る、實に生々と輝かしい) もし私がまだソファアに座つたまゝで居たら、あなたは私がお行儀が悪いと思ひ下さつて結構よ。

ブラウニング さう思ひますよ。その通りに、で早く言つてくれませんか、僕は一日中氣がかりで、身震をして居た程ですよ。醫者が來たんでせう。何て言ひました？

エリザベス フォード・ウォーターロー先生は、私が非常によくなくて居るので、びつくりして喜んで下さつて。あの何時ものしかめつつらも消えた程でしたの。

ブラウニング (喜ばしげに) も一度言つて下さい！

エリザベス もう一度？ 全部を？

ブラウニング 僕は此の四方の壁に、其の言葉が燃える字となつて書かれるのを見たい。僕が君を訪ねる事を許されて以來、今日が一番嬉しい時です。あれは何時だつたつて？

エリザベス 三月前ですよ。

ブラウニング 馬鹿な。僕達はすつと友達だつた。僕は生れて以來すつと君を知つて居た。醫者達は相好を崩して喜んだのだつて？ 素敵だ、勿論僕はあなたが何時か窮地から出るだらうつて事を何時だつて疑ひはしなかつたよ。世界は君の様な人の命を浪費させる程、富んでは居ない。だが僕でさへ、回復がこんなに早いとは思はなかつたよ、そしてイタリーの事は？ 二人の醫者は君がイタ

リーで冬越をするのを賛成したかね？

エリザベス (遠慮勝な聲で) ええ。

ブラウニング そして旅行するには何時がいゝと言つた？

エリザベス 再發さへしなければ、十月の半ばつて。

ブラウニング 再發だつて！ そんな事を言ふもんぢやありませんよ。十月！ 素敵だ。何故つて、君も知つて居る様に十月は僕の都合にもびつたりはまるしね。

エリザベス あなたの都合つて？

ブラウニング 僕がイタリーで冬を過さうと思つてる事を話したのを感じてませんか。決心したよ。實は僕「ソドロ」を書きかへる事にしました。英國では満足の行く様に仕事が出来ないんです。ぬか雨と霧の地ではイタリーの雰圍氣は得られないから。イタリーで度々伺つてもいゝですか。何處に居るつもりです？ (エリザベス笑ふ) 何かをかしいですか。

エリザベス イタリーにいらつしやつたら、私を訪ねて下さる時に七里もある長靴がいたと思ふわ。ブラウニング 一體どう云ふ事なんです？

エリザベス 私、此の冬はウインポール街の五十番地に居る事になるでせうよ。

ブラウニング 此處に？

エリザベス ええ。

ブラウニング けど、君は言つたぢやないですか、二人の醫者が……

エリザベス 先生はさうおつしやつたけど、決定権は先生にはありませんもの。

ブラウニング お父さんですか。

エリザベス さうなんですの。

ブラウニング お父さんがいけないつておつしやつたんですか。

エリザベス いえ、はつきりと言つたわけではないんですけれど。けれどきつと行けないと思ひますわ。

ブラウニング だが醫者はお父さんに此の轉地が生と死との境目になるかも知れないつて事を話したんぢやなかつたのかね。

エリザベス フォード・ウオーターローさんが強くさう言つて下すつたと思ふんですけど……

ブラウニング 其れぢや、一體どうしたと言ふのです。

エリザベス (口早に強く) 立場をよく知らない人に説明するのはむづかしい事ですわ。父は私を大變愛してしますの、そしてね……

ブラウニング 愛してゐるつて？

エリザベス とても愛してくれてますの、献身的に。そして私が一緒に居る事をとても力にして居れるの。弟や妹達とは餘り近しくして居ませんの。もし私が六ヶ月も居なかつたら父は……

ブラウニング (明かに自らを制しつゝ) バレットさん、卒直に言はせて下さる？

エリザベス (困つた風に) おつしやらない方がよくはなかつて？ 此の事についてあなたがどう思つていらつしやるか、多少わかりますわ。けどあなたはまだはつきり私の立場を了解してらつしやいませんわ。ねえ、どうしておわかりになる事が出来ませう。

ブラウニング さうですか、それなら何も言ひますまい。(彼は急に自己を制しきれず、その言葉は急流の如くほどばしり出る) 君は僕が理解してないと言つたね、さうです。全くさうです。君はお父さんが、君を献身的に愛して居ると言ふが、寵愛を権利の如く求める愛慕は僕にはわからない……義務と、尊敬と、柔順と、献身的な愛を求め、總てを奪ひ、何物をも與へない献身的な愛と言ふのは僕には解らない。下らない虐待と、甚だしく弱者いぢめをする様な献身的な愛は僕には解らない。少しの輝きも、一寸した幸福をも與へ様とせず、自分の貪慾を満足させるために、君の命を賭す事さえする献身的な愛と言ふものは僕にはわからない。献身！ そんな献身よりも、むしろ正しい完全な憎しみを與へてくれ！

エリザベス ブラウニングさん、どうぞもう……

ブラウニング ゆるしておくれ、だが僕はもう黙つて居られない。僕が君に會ふ前でさへ、君の生活を暗くする影は病ばかりぢやない事を知つて居た。そしてその後、ずつと君は一言も不平をもらさなかつたが、僕は其の影が深くなつて行く様に思つた。だが僕は、只第三者として傍觀して居て、何も言はなかつた。醜きたわむれとして、君の父と神の選ひ給ひしその人と君との間に、口をさしはさむ自分は一體何者だ。單なる友達なのか！ 僕が餘りにもあり／＼と想像出来る不愉快な出来事等の後で君が疲れはてて、病氣になつて有様を見出したとしても……しかも僕は其に對し知らない、何も見えない、何も感じない振りをしなければならぬのだ。もう今日限り其れは止めた。これ以上黙つて云ふなりになるのはお断りする。君の幸福と慰安だけぢやないのだ。君の命そのものが危険に瀕してゐるのだ。君は生命を玩んではいけない。僕は之を言ふ権利を持つて居るんです。エリザベス (絶望的に) いゝえ／＼、どうかもうこれ以上おつしやらないで下さい。

ブラウニング (熱情に驅られて) 權利！ 君は其れを否定しはしないだらう。君は全く卒直で正直だ。僕達が初めて會つた時、僕に愛を語る事を禁じたね。僕達の間には友情以上のものがあつてはいけないと。僕は君の言ふ通りにして來た。けれど僕、いや僕達二人とも、僕が君の友達以上のものになる事がわかつて居た。僕が此の戸を入る前、そして僕達がお互に會ふ前ですら、僕はもう君を愛してた。言ひきれぬ程愛してゐる。そして僕は一生君を愛し通す、解つてゐるだらう。ずつと君は

解つてただらう？

エリザベス (きれ／＼に) えゝ……えゝ……解つてました。ねえ、どうか後生だから、私と別れて下さい。

ブラウニング (彼女の両手を掴みつゝ) 駄目だ。

エリザベス どうぞ／＼、去らせて下さい。私と別れて下さい。私達は二度と再び會つてはならないんです。

ブラウニング 決して放しはしない。別れはしない。(彼女を両手に引きよせて) エリザベス、エリザベス。

エリザベス (彼の抱擁に僅かにもがきながら) いえ／＼、ロバート、どうぞ……

ブラウニング エリザベス (接吻す。彼の唇が觸れるや、エリザベス、ブラウニングの首にだきつく)

エリザベス ロバート、私はあなたを愛して居ます。私はあなたを愛して居ます。

(再び互に接吻し合ひ、エリザベス椅子にドカリと座り込み、ブラウニング彼女の手を取り側に跪く)

ブラウニング 其れだのに僕に出て行つて、あなたの生活から消えろと言ふのですか。

エリザベス え、さうよ、ロバート。私はあなたに何も捧げるものを持つてませんもの。愛が求めるものを何も持つてません、美も、健康も、何もありませんし、其上もう若くもありませんし。ブラウニング 僕は君を愛してる。

エリザベス (心の中の興奮をおさへて) 最初お目にかゝつてから、再びお會ひする事をお断りしなければならなかつたんです。何故つて、自分で否定はしてたんですが、もうあの時にあなたを愛して居ました。ロバート、エヴァもあの樂園パラダイスに初めて曉の光がさした時、私と同じ様に恐しさ、驚きヨロコビを覺えたに違ひありません。私は只のお友達であると云ふ、あはれな口實以外、自分の氣持をおさへる力がありませんでした。私は嬉しさでいくちなしになり、力がなくなりました。とても夢にも思つてなかつた喜びで……私には只一つの口實しかないので。神様は私がかさうした口實がいてるんだつて事御存知ですね、だからあなたをすぐ私の許よりお去らせしなかつたのです。

ブラウニング 僕は君を愛してる。

エリザベス 私の命は本當にどん底まで來てたのです、衰弱し切つて望も消えはて、居たのです。其處へあなたがいらつしたんです。ロバート、あなたは何をして下さつたか知つてらして？ チェンバース先生が私は生きやうと云ふ望でよくなつたんだとおつしやつた時をかしかつたわ。先生のおつしやつた事は本當なんです、其の通りなんですもの。先生は其の言葉の裏に何が秘んで居るか

御存知なかつたの。私は生きて居たかつたの、一生懸命に、死者狂ひで……其れは只、生きてる事は貴方、貴方を……貴方のお顔を拜見する事、貴方のお聲、そしてあなたの手がなつかしかつたからです。いゝえ、其れ以上にです、貴方ある故空氣が再び香しくなり、世の中が幸福になり、生々となりました。

ブラウニング (彼女の手に接吻しながら) その様な言葉を耳にしながら、僕に背を向けて出て行くと云ふのですか。

エリザベス けどロバート、おわかりにならないのですか……不可能である事が……

ブラウニング 僕は未だ曾て友人をも、敵をも見棄てた事がないのに、僕は君を見棄てさうに見えるんですか。

エリザベス けど、此の先どうなるでせう。前途にどんな望があるでせう。それに……

ブラウニング 僕は君を愛してる、君を妻にしたいのだ。

エリザベス ロバート、貴方と結婚する事は出来ません、どうして結婚なんか出来ませうか、こんなブラウニング 今日とか、明日とか、今年とか、來年とか言はない。未だ何年もく先の事かも知れない。

エリザベス 私は永久に貴方と結婚する事は出来ないかも知れません。

ブラウニング そんな事が何だ。もし僕が一生君を僕の妻にする事が出来なくても僕は一番尊い贈物を得る爲に一生涯努力し続けた事をほこりともし、又幸福と思つて死んで行く。

エリザベス いけません。私の夢を忘れて下さい。そして現實の私を私と思つて下さい。私は本當に貴方を愛して居りますが故に、私の様な蒼白いやせた者を追求める爲に、貴方の一生を無駄に過させる様な事はしてはいたゞきたくありません。

ブラウニング 君は僕が只一寸した衝動で自分の考へを棄てる様な人間だと思ふのですか、其れとも現實を直視しない感傷的な夢想家だと思ふのですか、僕程はつきりと確かな眼で物事の有の儘を見たり、しつかり大地に足をつけてる者はありませんよ。眞剣に言ひますが、僕は君にとつてかくべからざる者である様に、君は僕にこつてなければならぬ者です。もし君の弱い體が僕の方が必要とするなら、僕の生命及び僕自身を完全なものにするには僕の力は君の弱い體をよび求めてゐる。

エリザベス (一寸間をおいて) ロバート、あなたは今日以後私の所へいらつしつたら、家の者が何と思ふか、お考へになつて？

ブラウニング 考へた。

エリザベス (口早に) 私達はお互に愛し合つてる事を内證にしておかなければなりませんわ。父の耳にでも入つたら大變ですから。

ブラウニング 解つてますよ。

エリザベス もし、父が貴方が只のお友達でないつて、少しでも疑を持つたら、貴方はうちへの出入を禁止され、私への手紙は檢閲され、そして私の生活は耐へきれないものになりますよ。

ブラウニング よく承知してますよ。

エリザベス 其に、ロバート、貴方はとても卒直で、あけすけなお方でせう。偽りをよそほひ、口實や欺瞞や、計略や、遁辭等を用ひて家へ來るつて言ふ事楽しくつて？

ブラウニング (誇らしげに笑ひ) そんな事僕嫌ひだ、大嫌ひだ。僕は嫌だつて事を喜ぶよ。

エリザベス だけどロバート。

ブラウニング 何故なら、少くとも君の様な人を得るには幾分か苦勞をするのが正當だ。すばらしいよ、何時々々までもつきない榮譽は埃と暑さをくらねば決して得られないよ。

エリザベス (つらさうに) 何時までもつきない……ロバート、萎れさうになつてる私、もう萎れはててしまつてないとしても、(ロバート押へ様とす) いけません。だまつてらつしやい。だまつてらつしやい。(立上り、窓際に行き何處を見ともなく外を見る。間もなく彼の側へ來て) ロバート、もし私達が今日別れてしまへば、お互の美しい思ひ出を命のある限り楽しむ事が出来るわ。私達は不仕合せになるわ。でも其の不仕合せは愛の爲に愛を棄てた者の不仕合せよ。幻滅も、苦しみ

も、後悔もない……

ブラウニング (低い緊張した聲で) 今話してるのは君か?

エリザベス 何なの?

ブラウニング 僕は君がわからない。僕は、君は打ちのめされるのもかまはず、思ひ切つた事をする勇氣其のものだと思つてた。此處に生活……人生の一番尊いものを僕達に捧げて居る生活があるのだ、其れなのに君は、君の手で間もなくそれを埃にしはしないかと心配して、其をとらへ様としないのだ。僕達は眞の幸福の爲に、眞の不幸を賭すより、残る生涯をなまぬるい悲しみの中に、夢の様に過ごさうとして居るのだ、僕は君が解らない。君は臆病者だとは思はなかつた。

エリザベス (誇り顔をして憤然と) 臆病者ですつて? 私が? (急に聲をかへて) え、さうですわ。私、臆病なんです! ロバート、全くの臆病者、けど私は自分自身の爲に恐れてるんぢやありませんの……

ブラウニング (大急ぎで彼女のそばに行き、腕の中に抱きしめて) 其はよく解つてる、エリザベス。エリザベス 私の様に一生の間、不幸ばかり續いたものにとつて新たな不幸は何でせう。けど貴方は戦士です……そして勝利と凱旋の爲に生れなすつた方です。もしも私の爲に貴、方に不幸な事が起つたら……

ブラウニング さうだ、戦士だ。だが一人で戦ふのはもういやになつた。僕の側に戦友がほしいのだ、そして……

エリザベス けど戦ひで傷をうけてない戦友を、ねえ……

ブラウニング いや、負傷した者だ……だが未だ怯まない、恐れない、勇敢な、屈しない者が……

エリザベス え、でも……

ブラウニング これ以上立派な戦友が求められるだらうか。

エリザベス けど、ロバート……

ブラウニング いや。

エリザベス それでも、ロバート……

ブラウニング いけない(言ひわけをしやうとするエリザベスの唇に接吻する。)——幕——

第四幕

— 數週間後 —



—ヘンリエター—

……お、お父様、どうぞ
私の云ふ事を聞いて下さ
い。お願いです。私は—
私は悪い娘ではありませ
ん。お父様にその事を誓
ひます。……

(アラベル、フラッシュユを連れて登場。アラベルは外出着を着て帽子を被つてゐる)

アラベル (開け放たれた戸口に立つて話しながら) ほんとうにお姉様、ウキルソンにお終ひの二、三段を上げてもらふ方がいゝわ、ねえ、お姉様。

エリザベス (外で) いや〜ウキルソン、私に觸つてはいや。

アラベル でもお姉様……。

(帽子を被り外出着を着たエリザベス登場。彼女は息切れしてゐるが勝ち誇つてゐる)

(ウキルソンはエリザベスの後に従つてゐる)

エリザベス ほら御覽! すつかり上つてしまつたわ。一休みもしないで! 誰にも助けてもらはな
いでね! 何て好い氣持なんだらう。ほんの少し息切れがしてゐるだけなの…… (エリザベスは一
寸体を左右に動かす。ウキルソンとアラベルは彼女を支へようと手を差出す)

いや、觸つてはいや! 私は本當に大夫丈なの…… (エリザベスはソファの方へ行つて腰掛け、
帽子と手袋を脱ぎながら云ふ) 扱て、何て素晴らしい勝利ぢやない事?

ウキルソン 私が馬車から下りて、確に歩いた事を知つてゐるでせう……公園の中を二哩歩いた事を
さ!

ウキルソン おやく〜 お嬢様!

アラベル あら！ お姉様。

エリザベス いゝわ。それでは一哩ね。兎も角も、私その事をチェンバース博士にお話しやうと思つてゐるのよ。

アラベル 本當に、お姉様！

エリザベス あゝ、フラツシユが貴女の着物をこんなに汚く泥まみれにしてしまつたわ。何んてお前は汚らしいのでせうフラツシユ……ウキルソン、お前フラツシユを連れて行つて。ジェニーにフラツシユを洗はせて頂戴。フラツシユは長い間洗つてないのだから。

ウキルソン (アラベルからフラツシユを取りながら) よろしう御座います、お嬢様。

(ウキルソン、フラツシユを連れて退場)

エリザベス (小束の手紙を指して) あら！ 郵便が來てゐる。その手紙、取つて頂戴な。

アラベル (手紙を渡して) まあ！ これはブラウニングさんの御筆蹟だわ！ 御免なさい、私、見ないぢや居られなかつた。だが、お姉様、今日午後あの方がお見えになる筈ぢやない事？

エリザベス (とぼけて) えゝ……

(エリザベスは封を切り、一人で微笑をたゝへながら讀む)

えゝ、ブラウニングさんは今直ぐ此處へお出でになる筈なの。この手紙は私にお休みなさいといふ事だつたのよ。

アラベル 貴女にお休みなさいつて……

エリザベス えゝ、この手紙は昨晚お書きになつたものよ。

アラベル あら……

エリザベス (手紙をめくりながら) ヘイドンさん、マーティノーさん、ホーンさん、あつ！

(エリザベスの聲は甲高く變化する)

之はお父様からの手紙だわ。

アラベル (心配氣に) お父様から！ でも今日お歸りになるのでせう……

エリザベス お父様はお歸りになれないのでせう……(エリザベス手紙を開く)

アラベル (希望に輝き) あら！ お姉様、さうなの。

エリザベス (彼女は急いで手紙に目を通す。それから驚いた聲で)

あら！……あら！ アラベル！……

アラベル なあに？

エリザベス 私達はロンドンを去るのよ。
アラベル ロンドンを去るつて？

エリザベス え、此の家を去るのよ。ロンドンを去るのですつて。お聞きなさい——

(戸を叩くと同時にヘンリエタの聲)

ヘンリエタ (外で) 入つてもいい、お姉様。

エリザベス お入り、(エリザベス、アラベルに急いで囁いて)未だこの事を云つちやいけない事よ!

(ヘンリエタ登場)

ヘンリエタ (大そう興奮して)あ! お姉様、貴女に直にあの方に逢つて頂かなければならぬわ!
きつと逢はなければいけないわよ!

エリザベス あの方に……

ヘンリエタ あの方は軍服の正装をして居らつしやるの、今セント・ジエームス宮殿にお出でになつてヴィクトリア女王陛下から親しく副官職——何かそんな物……よく知らないけれど——を陛下から授けて頂きに行つてゐらつしたのよ。何て立派に見える事でせう。何て素敵なんだらう。お姉様と會つて頂く様にお連れして來てもいい?

エリザベス でも!

ヘンリエタ お父様には内密ナイシユにしておきませう。あ! お姉様、お連れしてもよくつて? お姉様はまだ一度もお會ひになつた事がないでせう。お會ひになるのに丁度いい時だわ——そして今程いい機会を得る事はもう出来ないわよ……あの、私はクック大尉の事をお話してるのよ、ねえ、分つて? エリザベス さう想像してたわ。でも今、私あの方にお逢ひ出来ないのよ。もう直ぐブラウニングさんがお見えになるから。

ヘンリエタ (諦めたか消然たる様子で)

あら! それなら勿論お會ひになる事出来ないわ。でもねえ、お姉様、私かうするわ。お姉様、ブラウニングさんがお歸りになるまで、あの方を引き止めて置くわ。あの方は氣にお留めにならないと思ふの。(ヘンリエタ戸の方へ急ぎ、肩ごしに振返つて)

お姉様のお好きにだけ、何時までもあの詩人を止めてお置きなさいよ。

(ヘンリエタ退場)

エリザベス (一寸笑を含んだが後には嘆息)さうだわ。ヘンリエタは出来る間、一心にあの軍人を大切にお接待モテナシした方がいいわ。將來逢へさうな見込がない事よ、可哀さうな子だ。

(エリザベス、パレットの手紙を取り上げる)

アラベル あ、お姉様、早く云つて……

エリザベス 御父様はこの手紙をドーキングからお出しになつたらしいよ。(エリザベス讀む)

「拜啓 家族一同今月二十二日、月曜日に愈々ロンドンを出立致す事に相成り申候故御通知致候。借り受け候家はロンドンより約二十哩有之、家具付の家にてサレー州のブツクハムに御座候。最も近き驛レザーヘッドより六哩離れ居候。借り受けし家が我が一家の永住と相成るや否や、未だ不明なれ共、兎も角、今冬は其家にて過す可く、其許の健康の爲にはこの田園の空氣及び新しき閑靜なる環境が好影響を與ふる事と考へ居候。又現在其許のロンドンにての生活―熱狂したる落着かさる生活が肉体的道徳的に惡影響を與へ居る事と痛感致居候間、轉居は最も善き事と存候。何卒此事弟妹に傳へ置き下され度く、明日歸宅の節一同には絶対に異存を述べざる様右御含め置かれ度候―とあれは今日だわ!」萬事決定致候間、其許始め一同轉居の準備致す様、右しかと申送り候 敬具

アラベル あら! お姉様。

エリザベス (激しく) まだ書いてあるわ。お父様は何時ものユーモアであの手紙を結んでいらつしやるわ。

アラベル ユーモアだつて?

エリザベス え、さうよ。「お前達の愛しき父より」と署名していらつしやるわ。

アラベル 二十二日に出發するのね。たつた二週間しか間がないのね。

エリザベス (怒つて) 私の熱狂的な落着きのない生活だなんて!―少しのドライヴや、二、三の友達を訪問したり、二、三の訪問者を受けたりするだけなのに! 御父様が私の事を見ずな放蕩娘つて何故云はなかつたのかしら。その上、私のイタリ―行きを駄目にしてしまつたし、又この陰氣な部屋を段々明るくしてきてゐる樂しみ―僅な樂しみ―から縁を切らうとしてゐられる。

(手紙をくしゃくにして爐の内に投げ込む)

アラベル お姉様、私解つてゐるわ。本當にお氣の毒ね。この家を去るにしても、私には大した影響はないの。私がどうしてもロンドンに居なくてはいけない様な事は、唯教會の仕事と地方訪問の仕事とでせう。でも、お姉様とヘンリエタとは……(少し躊躇つて)

エリザベス え、何ですつて?

アラベル (突然力を込めて) あ、お姉様、私達がロンドンを去つて新しい家に移るのが不幸に見えるかもしれないが、反つて實際は幸であるかもしれないと云つてもお怒りにならないで下さいよ。エリザベス 不幸に見えて幸だなんて! 私はずつとその敬虔な宗教の假面を被つた因襲で育てられて來た様に思はれる。それは如何な意味なの?

アラベル 私達は此の家ではお互の事について何も知らない風をしてゐるのですわ。可哀さうなヘン

リエタの事を除いては、その方が無難ですわ。けれど私達はお姉様とブラウニングさんについて知つてますよ。

エリザベス 何ですつて？

アラベル お姉様があの方を心待に待つてゐらしやる時のお姉様の顔を見さへすれや、解りますわ。そして歸られた後のお姉様の……

エリザベス (誇らしげに) 私はあの方を愛してゐるのよ。あの方も私を愛してゐらつしやるわ。其れがどうしたといふの？ 他の婦人の様に一体私は愛し愛される権利を持つていなるのでせうか。

アラベル え、持つていらつしやるわ、お姉様。でも如何なる事ですえう？ お父様が生きてゐらつしやる限りは、私達の誰もお父様の許しを得て結婚するといふ事は出来ないでせう。——そしてお父様の許しがなくて結婚するなんて、思ひもよらない事としか考へられないわ。けれど、お姉様の場合、結婚は單にお父様の承諾のみの問題ではありませんわ：勿論、お姉様は不思議な程強く丈夫におなりになつたわ——丁度今も御姉様はらやんとお二階までお昇りになつたわね……でも——エリザベス でも、たとへ私が二三段階を昇つたとしても、私は結婚なんかするに適しくないのよ。アラベル、かうお前は云はうとしてるのでせう。

アラベル あ、お姉様、私が強いてこんな事を話すなんて、お姉様を非常に愛してゐるからなのよ。

お姉様をお苦しめさせたくないからなの。それでむりにこんな事云つてるのよ。私は、男の人達は自分の愛し合つてゐる婦人達と結婚しやうと、望んでゐるといふ事の外は、餘り男の人については知らないけど……あの……ブラウニングさんを少しも知らないのよ。でも——でも、どんな立派な偉大な詩人でも、時が来れば身を固めて自分の家庭や、妻や、子供が欲しいのだと思ひますわ。……でも、もしも……だつたら非常に恐ろしい事ですわ。

エリザベス (突然立上つて) 黙つてゐて、黙つてゐて頂戴。アラベル、今までにそんな事、幾度か私が考へただらうとは思へないの？ (窓際に行つて外を眺る)

アラベル 濟みません。私は邪魔をしやうとは思つてませんの。唯お姉様に苦しみなどを……(アラベルはエリザベスが早聽いてなんかゐないで、街を通つてゐる誰かに手を振つてをり、エリザベスの顔が喜びで變つて行くのを知る)

お！ (彼女は立上つて、エリザベスに氣付かれぬ様靜に部屋を出る)

エリザベス (振り返り) ブラウニングさんが今……(部屋に誰もゐない事に氣がつく) あ、……(目は父から來たくしやく／＼になつた手紙(爐の中にある)に注がれる。それを取り出し手でのばす。顔からは喜びが消える。手紙を爐上の棚に置く。戸を叩く音)

お入りなさい。

(ブラウニング登場。暫く二人は無言にて見合ふ。ブラウニング、エリザベスの傍へ行き、エリザベスを抱く)

ブラウニング 愛しきエリザベス……

エリザベス ロバート……

(二人接吻する)

ブラウニング (片腕に抱いたまゝ、その腕を延してエリザベスをすつと離し) 疲れてゐる様ぢやないか、今日はどんな事をした?

エリザベス (強いて元氣に) 私はドライブをしましたの。そして公園を散歩したのよ。公園から歸つて二階まで一息に階段を昇りましたの——一休みもしないで。

ブラウニング それや、あんまり……でも、エリザベス素晴らしい事だ。よく昇れたね、僕は嬉しい! 此處へきてお坐り、君は偉い、僕は得意だ。

(エリザベスをソファアに連れてきて二人坐る)

所で、君は少々野心が大き過ぎはしないかね?

エリザベス そんな事ありませんわ……

私はとても気分がいゝのよ。

ブラウニング 私を見て御覽。

(ブラウニングを見る)

どうしたんだい? パア!

エリザベス 何でもないわ……

ブラウニング お父様はお歸りになつた?

エリザベス いゝえ、今日お歸りの筈よ。

ブラウニング (エリザベスの顔に両手をあてゝ) 物を云ふ君の目に何か悲しみが湧れてゐるよ。何か悪い事でも起つたのか? 何だか話して御覽。

エリザベス ロバート、爐上の棚の上にある手紙を読んで御らんない。

ブラウニング (爐の傍に行つてバレットの手紙を取る) お父様からお手紙?

エリザベス えゝ。

(ブラウニングは手紙を読んで變な笑を浮べて彼女を見る) だ?

ブラウニング (尙笑ひながら) 君はその小さい手でこの手紙をくしゃくしゃにしたらしいね。確に君は爐の中にこれを投げたんだらう。

エリザベス え、投げたの、でも。

ブラウニング どうして？

エリザベス おも——ロバート、この手紙は一體私達にとつて如何いふ意味かお解りになつて？

ブラウニング 解るよ、君よりもよく解つてるだらうね。

エリザベス 私よりもつと？ あ、御自分を欺いてはいけませんわ！ ロンドンから新しい家に移るといふ事が私達には大して關りがないとも思つていらつしやるのでせう。ロバート、貴方は私が新しい家に變つても、ロンドンからいらつして此處で度々會つてゐる様に會ふ事が出来ると思つていらつしやいますでせう。でも、それは考違ひよ、考違ひだわ。貴方は私の様に父を御存じぢやないわ。父はロンドンでの私の生活、快樂、友達を嫉妬する様になつてゐますの——そして私はゆる／＼と間違ひなくさうした事から引離されてしまふでせう。こんな事が何時かは起るだらうと思つてゐました。あ、ロバート、もうすぐ貴方と少しもお目にかゝれなくなるでせう……

ブラウニング この貴重な手紙はそんな事を示してゐるのかもわからないね。然しこの手紙は君がまだとても會得出来ない重大な事を表してゐるのだよ。

エリザベス 重大ですつて？

ブラウニング つまり君がこの月中にイタリーへ行く事になるのだ。

エリザベス (囁いて) イタリー……？

ブラウニング さうだ——そして僕と共に。

エリザベス ロバート……

ブラウニング 僕等はすぐに結婚せねばならない。

エリザベス (立上りながら) 貴方は自分で何を云つてゐるんだかお解りになりました？

ブラウニング 勿論何を言つてゐるかわかつてゐるよ。だから僕はかう繰返してゐるのだ。僕等は直ぐに結婚せねばならぬのだと(彼女の傍へよつて) ねえ、聞き給へ！

(彼女の手を握らうとしかける)

エリザベス……(後づさりしながら) いけません！ 觸れないで下さい！ 貴方のおつしやつてゐる事は途方もない事です……貴方とは結婚出来ませんわ——決して出来ません。

ブラウニング (眞赤になつて) 結婚出来るよ。させて見せる！ もし僕が此の家から君を抱へ出し、祭壇に抱えて行かねばならないにしても君と結婚するんだ。(氣を靜めながら) 今君との交際が切

れやうとしてゐるのを僕がそのまま放つておくと君は眞面目に考へるかね？

僕が正氣の沙汰とはどうしても思へない人に、勝手氣儘に思ふ存分嫉妬させておいて、それで黙つてゐると思ふかね？ 今になつたらもつと僕の性質が解らなくつちや。

エリザベス (急いで口をはさむ) あゝ、ロバート、私達の結婚の邪魔になつてゐるのはお父様だけではありませんの。私なんです—私なんです……

ブラウニング 何度も／＼その事ならもう話し合つたぢやないか。

エリザベス えゝ、でも！ 今もう一度考へなければなりませんわ。お互に心を打明けて、これを最後にしてね。

ブラウニング 然し——

エリザベス (身振りで彼を押静めながら) ロバートさん、お互に欺し合つたりしても仕方がありませんわ。たとへ私が非常に丈夫になつたとしても、私は何時でも病身でせう。貴方は私が病氣であつても丈夫であつてもちつとも、そんな事に關らず私を望んでゐるのだと仰言います。それやとても有難い立派な御言葉じす、そして私は貴方がさう信じて居られるといふ事も解ります。

でも、ロバートさん、私はそんなに寛大な心の持主ではありませんの——むしろ誇の高い人間です。有體に云へば……、だから貴方がどんな事をおつしやつて下さらうとも、私が貴方の生活や青春の

犠牲になるつて事、徹頭徹尾感じてゐますのに、そのまゝ、御言葉を受け入れる事は出来ませんわ。貴方の妻として私あるが故に貴方が享受出来ない總ゆる幸福、自由、安樂、冒險、愛慾等の幻影に私は一日中悩むのに決つてゐますわ。

ブラウニング いや／＼、聞き給へ。

エリザベス (魂の底から聲をしぼつて) あゝ、ロバートさん、私は貴方との間に出来る未來の子供の幻影に悩むのに決つてゐます……あの手紙を読みました時には、私の世界が崩れてしまふのぢやないのかと思ひました。……でも私達が未だ自由で猶、握手する力を持つて、左様ならが云へる時にこの手紙が來た事を神に感謝致します……(彼女は手を差出す)

ブラウニング (態度をすつかり變へて、エリザベスの手を無視して靜かに事務的に話す) 大體僕は何も善い戦法ではないかと思ふのだ。家族達は此處を廿二日に立つんだ—手紙を見る—だから僕等は僅に二週間の間に萬事を片付けねばならないんだ。先週君は僕にエドロー氏が今度の土曜日にリツチモンド公園へ遊びに行かうとヘンリエタやアラベルを誘つてゐるんだと話したね、だからその日は丁度家には誰も居なくなるだらう。僕等はマリー・レー・ボン教會で出會ふ事にしよう。そして午前中に靜かに結婚しやう。すぐに結婚許可狀の手配をしやう、そして教區牧師にも出會ふ事にしやう。

エリザベス (當惑して恐ろしさにブラウニングを凝視する) ロバート

ブラウニング (以前の様に) 結婚した日に英國を去つてイタリアに行くのは亂暴な事だらう。君には旅行に出る前に、出来るだけ充分體を休めておく事が大切だからね。だから僕等が結婚したら、すぐ君はこの家に歸つて一日か二日緩つくりと静養して、その間に色々準備しておく方がい、だらうと思ふのだよ。もし僕等が土曜日に出發するとすれば、まだ六日間の餘裕があるわけだ。扱てー(ボケツトより紙片を出して)

エリザベス あゝ、止して下さい！ その事はもう聞く事は出来ないのです。

ブラウニング (尙も紙片を見ながら) 此間からこの様ないざといふ時に、役にたつ様にサウザンプトンから出帆の船を注意して調べて置いたのだ。定期船が毎週土曜日の九時にロイヤル突堤から出帆する。僕等はボークスホールで五時の急行車に乗らねばならない。その急行はサザンプトンに八時に到着するからね。

エリザベス おゝ……(からくと笑ひ、笑ひがすゝり泣きに變る。)

(ブラウニング、エリザベスを抱きソファアの所へ連れていつて並んで坐る。エリザベスの泣聲は次第に靜まる。切れ／＼に云ひながら) ああ……私は何時もお父様が此の世で一番權幕の強い人だと信じてゐましたのに……

ブラウニング (微笑みつゝ) しかも君は大分長い間僕を知つてゐるのに。

エリザベス だつて私は負けてはならないのです。——いけません——駄目です。

ブラウニング 君、僕等がすぐ決めなければならぬ非常に大切な事がまだ残つてゐるよ。それは君が女中を連れないでは到底旅行出来ないと云ふ事だ。ウキルソンは僕等の關係をうす／＼知つてゐるに違ひない。前に君はウキルソンがよくしてくれると云つた事があるね、然しウキルソンが喜んで僕等と共にイタリアへ行つてくれると思ふかね？

エリザベス (少し經つて小聲で)

ロバート……旅行中に私の體が弱つて病氣になるかもしれないと御思ひにならなくつて？

ブラウニング あゝ、さう思つたよ。

エリザベス そんな事はないでせうが私が貴方に抱かれて死んだとしますと？

ブラウニング (靜に見つめて) 君は恐ろしいの？ ねえ！

エリザベス (高慢に憤然として) 恐ろしいですつて？ 私が？ 私が恐ろしくないとつて事は御存じの筈です。私が貴方と結婚しないで長生きするよりも、貴方と一緒に早く死にたいと思つてゐるといふ事も御存知でせう。……でも／＼、もし私がそんな風に死んでしまふ様な事があつたら、貴方はどうお感じになりますでせう。……そして世間はどんなに貴方の事を云ふでせう？

ブラウニング (静に) 世間から僕が受けるものは人殺しの汚名よりさしていゝわけのものでもないだらうさ、僕の感想についてはそれは君の想像にまかすさ……

エリザベス それでも貴方は一緒にイタリーへ行かうと仰言いますか。

ブラウニング さうだ。僕は君の生命を賭するのは覺悟の上なんだ。僕自身の生命よりも君とどんな危険を冒してでも、この恐ろしい家から明るい土地へ連出し、僕の妻にしようと豫め覺悟してゐたのだ。

エリザベス 貴方、私をそんなに愛してゐて下さるの。

ブラウニング 僕はそんな風に君を愛してゐるのだ(永らく経つて)

エリザベス ロバート……貴方は、貴方は私に一寸考へさせて下さいませんか？

ブラウニング 餘裕は少いんだよ。

エリザベス え、解つてゐてよ。でも、私暫く考へなければならぬわ。どうしても今決める事は出来ませんの……暫く考へたら、どうすればよいかはつきりと解ると思ひますの……。どうぞロバートお願いです……二、三時間御與へ下さい。今晚寝るまでに手紙を書いて決心をお知らせ致しますから。

ブラウニング その事確に約束してくれる？

エリザベス え、きつと御約束致します。

ブラウニング ぢやよろしい。

エリザベス 有難う。

ブラウニング もう、お暇しやう？

エリザベス どうぞ……

(ブラウニング膝まづき、エリザベスの両手を振り熱中して、唇を押しつける。エリザベス素直に愛撫を受く。ブラウニング立ち、静に部屋を去る。エリザベスちつと坐つて前方を見つめてゐる。その時戸を軽く叩く音。間。もつとつきつく叩く音。
る。エリザベス物思ひからさめる)

お入りなさい。

(ヘンリエタ登場)

ヘンリエタ ブラウニングさんが階段を降りて來られるのに出遇つたのよ、……あの方をお連れしてもいい？

エリザベス あの人を？

ヘンリエタ あの方は踊場の所に立つて居られるのよ……(エリザベスをちよつとゆすぶる)

しつかりしてよ。私はサーティースさんの事を云つてゐるのよ。

エリザベス え、勿論解つてゐるわ、でも今でなくても好いではないの。

ヘンリエタ いけないのよ、あの方が軍服を着ていらつしやるよ云つたでせう。お姉様はあの方に逢ふと約束して下さつたのよ。お姉様!

エリザベス (溜息をついて) いゝわ、では……

(ヘンリエタ、エリザベスに衝動的に接吻して、戸口に行き戸を開く)

ヘンリエタ (廊下へ話しかけて) お入り下さい、サーティースさん。

(サーティース大尉登場、彼は大きな美しい人物で髯を生やし、正直さうな顔をしてゐる。軍服の正装に身をかため、帽子を脇にかゝへてゐる)

サーティース。クツク大尉よ、お姉様、そしてこれは私の姉のエリザベスなの。

(エリザベスは立ち上つてクツクを迎へる。クツク大尉は両方の踵を合せて固苦しいお辭儀をする)

クツク バレット様、貴女の僕なるクツク大尉です。

エリザベス (クツクに手を差出して) 初めまして……

クツク (エリザベスの手をおし載いて) 身に餘る光榮です。これ迄誰もが此所でお目にかゝるわけにゆかないつて事承知してゐます。

ヘンリエタ 本當に、さうなんですよ。サーティースさん、家族の者の他にはこれ迄紳士はめつたに御姉様の部屋には入れませんのよ。

クツク 一日に重なる光榮に浴しましたよ。先づは皇后様に、今はバレット様に、僕の様な者がこんな光榮に浴さうとは考へられなかつた。

エリザベス すつかり忘れてゐました。貴方は宮殿から來られた所ですね、私はまだ一度も女王様にお目にかゝつた事はありませんの。どんな方なんでしょうか。

クツク 大變お小さい方です。しかしあく迄も高貴な方です。

ヘンリエタ サーティースさん、貴方劍を着けていらつしやらないのね。

クツク 前にも云つた様に宮中で劍をつけるのは不作法なんです。

ヘンリエタ まあ、うるさい作法だ事、お姉様に正装の貴方をお目にかけて度の、何所へ劍をお置きになつたの?

クツク 廣間に。

ヘンリエタ 持つて來るわね。(戸口へ走る)

クツク 構はないよ。實際バレットさんはそんな劍なんか見たくないだらうに。

(ヘンリエタ出て行く)

エリザベス　でも私は本當に見たいのですよ。クツク大尉、私はまだ正装の將校を見た事はありませんのよ、觀兵式や儀式の時の外は——そしてそれもすつと前の事ですわ。

クツク　本當ですか。(少時黙つて後) バレットさん。

エリザベス　はあ？

クツク　バレットさん……

エリザベス　(勵ます様に) はあ、クツクさん？

クツク　ねえ、バレットさん……

エリザベス　ヘンリエタの事を何か云ひ度いのぢやありませんか？

クツク　(熱心に) さうです。バレットさん、確にさうです。貴女は御存じです。バレットさん。よく御存じです——(彼は續ける事が出来ない)

エリザベス　(親切に) 解つてゐますよ、クツクさん。お助けする程に力もありませんが私を信じて

下さい。衷心より同情して下さるよ。(クツクに手を差出す)

クツク　(兩手でそれを受けて) 有難うく、身に餘る程です。有難うバレットさん。あんないゝ娘

はありません。ヘンリエタの事を云つてゐるのですが、どうしてあんないゝ人が與へられたのか私

には解りませんが……

(ヘンリエタ劍を持つて登場)

(エリザベスとクツクとはまだ手を取りあつてゐる)

ヘンリエタ　やはりさうだつたわ。私が部屋にゐない間にクツクさんが何かお姉様に話しをなさるだらうと思つてゐたのよ。本當に何か話しが出来て？

エリザベス　(笑ひながら) えゝ、でも、すつかりではないわね、クツク大尉？

クツク　はあ——貴女は御存じです。……多くの婦人達のように——本當に呑み込みがおよろしい……

エリザベス　えゝ、解つてよ。(ヘンリエタに接吻しながら) 貴女方二人の爲に何かして上げられ、

ば好いのね。

ヘンリエタ　お姉様、貴女はお父様のお氣に入りかも知らないけれどこればかりはね、誰にだつて出来な

いわ。(膝に劍を横へて坐る) サーティイスさんは私の結婚や色々の事に付てお父様にお願ひしやうと思つてゐられるのよ——月並の婚約者と同じ様に。私はそんな事はウキンポール街五十番では容易には出来ないといふのに彼は信じないの。

エリザベス　(熱心に) 私を信じて頂戴。クツク大尉、そんな事は本當に無駄以上なんです。貴方は斷乎として此の家によせつけられなくなるかも知りませんよ——そしてヘンリエタにどんな事が起る

か知れませんわ!

タツク 私は大した配偶者でない事を十分承知してゐます、バレットさん、貧乏なんです。俵給の他僅かのものしか持つてゐません。恥づかしからぬ位置とかさうしたものは持合せてゐますが……相嘗な家庭やその他のものを! 若し必要なら軍務を辭して事業をしてお金を儲ける事も喜んでしたいが、しかし——

ヘンリエタ そんな事をしては美事に失敗なさるでせう。おゝ可哀さうな私。

タツク まあ、そんな事ははつきり解らないよ。勿論軍務が私の特別な仕事である事は認めます。他の色々な仕事に適する様な才を持つてゐないかとも思ひます。でも私の様なつまらぬ男がヘンリエタの様な立派な人を、妻に貰へて自分の努力に酬いてくれるのですから、如何な仕事だつて出来るかも知れませんよ、バレットさん。

ヘンリエタ おゝ、お姉様、クツクさんに私達の事を解つていただく事が出来て? 私には出来ないわ。

エリザベス (非常に感銘的に)クツク大尉、若し貴方がエルドラード黄金郷の王子様で、片手に月の國からの嫡流の子孫といふ名門の生れを持ち、他方の手には最も近い獨立教會からの善い品行の證明を持つてきたとしても——それでも父は貴方を追ひ歸へすでせう。さあお解りになりましたか。

クツク どうしても解りませんね。

ヘンリエタ まあ、兎も角貴方が父にお話しになつてはいけないのよ、そして軍務をお辭めになつてもいけなくてよ、得意の姿にある貴方を見た今、軍服を脱いだ貴方を私が受けるとお思ひになつて? お立ちなさい。劔をつけてあげませう。

クツク うん、あの、(立ち上る。むしろ内氣に笑ひながら)

ヘンリエタ (劔をつけたがら)お姉様は詩人は—少なくとも或る詩人は—人生の花だと思つていらつしやる、お姉様が間違つてゐる事を見せてあげるつて云ふ事なの。

クツク あゝ一寸、劔を反對につけてゐるではないか、劔は左腰に吊るのだよ、

ヘンリエタ 何故?

クツク それや——

(父バレット登場。驚いた様子でその状景を合點し、途端にその顔は凍つた様な不愉快な型にはゞつてしまふ。二人の娘は驚いて父を見つめる。クツク大尉は硬くなつて立つてゐる)

エリザベス お父様、お父様は思つてたより早くお歸りになつたのね。

バレット 儂はこの方をお見受けしたと思はんが一體誰だね。

ヘンリエタ クツク大尉、父を紹介致しませう。これは父です。—此方はサーティース・クツク大尉

です。

クツク 初めまして。

(二人は固苦しくお辭儀をする)

ヘンリエタ (少時してから) クツク大尉はジョーヂとオキイの仲好しのお友達です。

バレット 成程。(クツクに) 息子達は今時分大抵家に居らん。

クツク 左様です—お宅の前を丁度通りかゝつて—萬一お目にかゝれるかも知れないと思つたのです—どちらかがお宅かと思つたりして……

バレット 成程。

エリザベス (話がとぎれる) クツク大尉は丁度バツキングム宮殿から來られた所ですの……そして

ヘンリエタはこの方の軍服の正装姿を私が見たがつてゐると思つたのです。

バレット 成程。(時計を取出して眺める)

クツク そんなに見て戴く様なものでもありません。勿論—御婦人は一寸した色彩がお好きなのです—おや、きつと遅くなつてゐるでせう。

バレット (時計をポケットに仕舞ひ) 五時十九分卅秒です。

クツク おや! 長居しました、お暇しなくちや。

(バレット氏は二度ベルの紐を引く)

左様なら、バレットさん。

エリザベス 左様なら、クツク大尉。(クツクと握手する)

(バレットは部屋を横切りて戸の所へ行き戸を開け放つ)

クツク 左様なら、ヘンリエタさん。

ヘンリエタ 御見送り致しませう。

(クツクはヘンリエタに送られて戸の所へ行く)

クツク (バレットに) では閣下これで失禮致します。

(バレットは黙つて答禮しクツク退場。)

ヘンリエタ、クツクの後について行かうとする。バレット身振りでこれを止む)

ヘンリエタ クツク大尉を戸口まで送つて参ります。

バレット 見送りは女中がしてくれる。

(バレット戸を閉め、黙つて部屋を横切つて暖爐の所にいきその前に立つ、眞直ぐ前を向いて話す)

お前の紳士訪問客の名簿が長くなつて行く様だね、エリザベス。

エリザベス 私はクツク大尉に今始めてお目にかゝつたのですわ。

バレット さうか、だが僕はこの部屋に入った時の様子から考へると、ヘンリエタはクツク大尉ともつとずつと以前から知り合つてゐる様に思はれたのぢや。違ふか。

ヘンリエタ クツク大尉を大分前から知つてゐますわ。

バレット あゝ、それで何時からお前はクツク大尉の服に劔をつけてやつてゐるのか。

ヘンリエタ 今迄一度もあの方の軍服姿を見た事はありませんわ。

バレット さうか、これから後は決して度々あの男の軍服姿や又陸軍通常服姿を見る事は出来んだらうよ。

ヘンリエタ (強い聲で) どうしてですか？

バレット (それに答へず) 僕が違つてゐるか解らん、だがエリザベス、一面識もない人がこの部屋を訪れる前に一應僕に知らせてくれる筈になつてゐると思ふんだが。

エリザベス ジョーヂやオキイのお友達を他人だなんて誰だつて云へないわお父様。

ヘンリエタ 私がクツク大尉に手を貸して劔をつけてあげたから、もうこの家に来てはいけないのですか。

バレット (ヘンリエタを無視して、エリザベスに)

手紙を受け取つたか。

エリザベス えゝ、お父様。

バレット あのクツク大尉とヘンリエタの様子を見ると、僕は自分の決心の正しかつた事を知つた。この家は直ぐにロンドンの半分の人達の會合場所となつてしまふ。

僕は此處に訪れてくれる人達が、皆子供達にとつて望ましい友人であるかどうかを見る暇もないし又そんな心持ちもない。幸ひ、借りる新しい家は町から大分離れてゐるから、お前達の友達もさう度々我々を煩はさないだらうよ、少くとも冬の間は。

ヘンリエタ (茫然と) 新しい家ですつて？

バレット (エリザベスに) エリザベス、皆に話さなかつたのか？

エリザベス アラベルは知つてゐますの。

ヘンリエタ 何の事です、私達はウキンポール街から外へ行つて終ふのですか。

バレット (ヘンリエタを見様ともせず) 私はサレーのブツクハムに家を借りたんだ、二十二日には引越すのだ。

ヘンリエタ どうしてですか？

バレット 僕は自分の行動を誰にも一取りわけ子供なんかに説明しない習慣ぢや。

ヘンリエタ　でもお父様、この事だけはお父様に聞く権利があるわ、もしクツク大尉が私達を訪ねてくるのを許して下さらないのなら、それはあの方がこの部屋に居て私があの方に剣をつけてやつたのを御覧になつたからですか。

バレット　（少し間を置いて彼女をじつと見つめ）クツク大尉がジョーヂやオキイの友達といつたと思ふが……

ヘンリエタ　ええ、でも私のお友達でもあるの。

バレット　さうか。

ヘンリエタ　ええ、あの方がお姉様に會ふ様に云ひ出したのも、あの方に剣をどうして付けるかを見せてくれる様に頼んだのも私なんです、だからあの方をお許しにならないのは不公平ですわ。何故なら……

エリザベス　（注意する様に）ヘンリエタ！

バレット　（鋭い低い聲でヘンリエタに）此處へ来い。

ヘンリエタ　（二、三步バレットの方に近づき少し息を切らして）はい、お父様？

バレット　（眉をよせて暫くじつと彼女を見てから足下の床を指す）此處へ来い。

（彼女は息を早めて恐る／＼真直にバレットの所へ行く。バレットはじつと彼女の顔を見てゐる。

そして低い不吉を豫言する様な聲で）あの男はお前の一體何んぢや？

ヘンリエタ　もう中上げたではありませんか、あの方は私達の友達なんです。

バレット　お前の何ぢやと云ふのぢや？

ヘンリエタ　おーお友達です。

バレット　それだけか。

ヘンリエタ　はい。

バレット　（突然ヘンリエタの手首を掴む。バレットの聲は鞭の鳴る様に響く）

嘘つき！

エリザベス　（鋭く）お父様！

ヘンリエタ　（あへぎながら）放して！

バレット　（強く掴んで）あの男はお前にとつては何なのだ。さあ、返事をせい、（ヘンリエタは自由にならうともがく、そして泣き出す）

返事をせい。

ヘンリエタ　お、お父様……どうぞ……

バレット　返事をせんか。

ヘンリエタ おゝ、どうぞ……そんなに……

バレット 何とか云へ。

ヘンリエタ (しめつけられる様な聲で) あの人は—あの人は—おゝ、お父様、私はあの人を愛してゐます。

バレット 嗚呼(小聲でヘンリエタの他の手首を掴んで、無理にヘンリエタを跪まづかせる) あゝ!

お前は—お前は、お前!(ヘンリエタは苦痛の叫び聲をあげる)

エリザベス (バレットの腕をとらへ) 放してやつて頂戴お父様、そんな事おさせ出来ません、直ぐ放してやつて頂戴。

(バレットはヘンリエタを振り放す。ヘンリエタはどさつと床の上に泣きくづれて手で顔を蔽ふ)

バレット (エリザベスに向ひ) お前は、お前は、これを、こんな汚はしい事を知つてゐたのか。

エリザベス ヘンリエタがクック大尉を愛してゐる事は大分前から知つてゐました。そして同情してゐました。

バレット お前はそれを恐れ気もなく儂に云はうとするのだね。

エリザベス えゝさうです。そしてもし出来る事なら、助けてもあげ様と思つてゐました。

バレット この事については、又お前と話をしやう。(ヘンリエタに) 立ちなさい。

ヘンリエタ (突然父の膝にすがり、激しく歎願する様な調子でいふ) おゝ、お父様、どうぞ私の云ふ事を聞いて下さい。お願いです。私は—私は悪い娘ではありません。お父様にその事を誓ひます。

お父様に嘘をつきましたが、どうも済みませんでした。でも止むを得なかつたのです。私は—私はあの方を愛してゐます。私達はお互に愛し合つてゐます。もしお父様が、あの方をこの家に來させない様なお積りなら……おゝお解りになりませんか、解らうとはして下さいませんかのですか。あの方は貧乏です。私達はまだ結婚しやうなんて考へては居りません。でもあの方はよい人なんです。そしてあの方を愛する事はいけない事である筈はありません。他の婦人達は人を愛します。何故私が愛してはいけないのでせう。私は愛を欲してゐます。愛なしには生きて行く事が出来ません。お父様がどんなにお母様を愛し、又お母様がどんなに貴方を愛したかを思ひ出して下さい。そしてしたらお父様は解つて下さいませう。そして私を可哀そうに思つて下さるでせう。

バレット (非常に厳しく) 立て。

ヘンリエタ どうぞお許し下さい、お父様。

バレット 立てつたら。

(膝をつかんでゐるヘンリエタの手を力強く拂ひ除ける。するとヘンリエタがひよろ／＼と立上

る)

其處へ坐れ。

(バレットは一脚の椅子を指示す。ヘンリエタ、どつかと椅子に腰をかけ、頭を垂れてぼんやり坐つてゐる)

何時頃からこんな事が續いてゐるんだ?

(ヘンリエタは一語も發しない)

儂の云ふ事を聞いてゐるのか? お前は一體どの位前からあの男と遊んでゐたのか。

ヘンリエタ 私―私は一年前からあの方を知つて居ます。

バレット で、お前はこれまで度々あの男と會つてゐたのか?

ヘンリエタ はい、會つてゐました。

バレット お前一人で會つてゐたのか。

ヘンリエタ えゝ、一人で……

バレット 何處で會つてたんだ?

ヘンリエタ 私達―私はあの方と公園の中で會つてゐました―そして……

(ヘンリエタ黙る)

バレット あの男と此處で會つた事があるのか。

ヘンリエタ はあ、會ひました。

バレット 一人でか?

ヘンリエタ (默す)

バレット 一人でこの家であつた事があるのか?

ヘンリエタ はい。

バレット さうか、この儂の家で秘かに男と會つたり、儂が全く純で善良オトナシと思つてる者に煽てられたりして……

ヘンリエタ 違ひます……

エリザベス (烈しく) よくまあ、そんな事が仰言れます? お父様。

バレット お黙り。

(ヘンリエタに向つて嚴い、氷の様な冷やかな聲で云ふ)
儂のいふ事をよくきけ、

こんな事が一、二年前にも起つたんだ。あの時に儂はお前の悪い心を抜き取つたと思つてゐたが、

僕は間違つてゐた。あの時、僕は非常に思ひきつた事をして片付けたが、もつと／＼断た乎る處分をしなければならなかつたんだ……だから今も、お前がこの僕に、もう決してあの男と會つたりしないし、又如何な方法によつても、文通をしないと固く／＼誓約してくれねば、僕はお前を勘當する。着のみ着のまゝで、今すぐこの家を出ていつてくれ、この家さへ出たらお前は好きな様に振舞れるんぢや。お前さへ望めば、地獄へでも落ちる事が出来るのぢや。

しかしこの事はお前には確に解つとるだらうな。一度僕の家を出たならば、この僕の目の黒い中はどんな口實を言つてやつてきても、決してこの家の鬨をまたぐ事は出来んのぢや。これ迄にお前は僕が下らん嚇しを云つたり、一度云ひ出したら決して後へ引かん質だといふ事を知つてと思ふのだ。

如何だ、お前の好きな様にするがいゝ。さあ！

ヘンリエタ (非常に心を痛めた後) 私の一生涯中この事のためにお父様を憎むといふ事は、お父様にとつては何でもない事じせうか。

バレット 當りまへだ。

ヘンリエタ でも……でも私、その事をクツク大尉に知らさねばならないわ。

バレット 僕がクツク大尉に話してやる。

ヘンリエタ (必死になつて) でもお父様……

バレット もう二度とあの男と會つたり、手紙の遣り取りをしないとといふ事を確かに誓言出来るか。

ヘンリエタ (暫くして力なげに) 仕方がないわ、

バレット エリザベス、聖書を一寸借してくれ。

エリザベス どうして？

バレット 僕はこのヘンリエタの口先だけの誓ひを受取る事は出来ん。

だがこのヘンリエタの様な者でも、聖書の上に手を置いてした誓ひを、破る事を躊躇するだらうと思ふのぢや、聖書をかしてくれ。

エリザベス 私の聖書はお母様の形見なんです、そんな事にこの聖書を使ふ事は出来ませんわ。

バレット お前の聖書をおかしたら。

エリザベス いやです。

バレット 聖書を借してくれんのぢやな？

エリザベス えゝ、お借し出来ません。

(バレットが呼鈴の紐をひく、暫時誰も話す者なく、身動きする者もない。ウキルソン登場)

バレット 僕の寢室へ行つて聖書を取つて来てくれ。手はきれいか。

ウキルソン (手を見ながら) 私の手でございませうか、且那樣。

バレット 手がきれいかと尋ねてるのぢや。

ウキルソン (ちよつと不愛想に) はい且那樣、今迄フラッシュを洗つて居りましたのでございませう。

バレット 寢室へ行けば寢臺の横の机の上に聖書がある。それを取つて来てくれ。

ウキルソン よろしう御座います、且那樣。

(ウキルソン退場。部屋にゐる三人は口をきかず、ウキルソンが歸つてくるまで身動きもしない。

ウキルソン再びバレットの聖書を持つて登場。聖書をバレットに渡して退場)

バレット (机の上に恭々しく聖書を置きながら、ヘンリエタに向つて)

此處へ来い。

(ヘンリエタ立ち上つて机の所へ行く)

聖書の上へ手をおくのぢや。

(ヘンリエタ云はれた通り手を置く)

僕の云ふ通りに云ふんだ、「二度とクツク大尉と出會つたり、文通したりしない事をかたく／＼誓ひます」

ヘンリエタ (一本調子の小さい聲で) 二度とクツク大尉と出會つたり文通したりしない事をかたく／＼誓ひます。

バレット さあ、お前の部屋へ行つて僕が許すまで引込んでをれ。

(一言も云はず、顔をあげてヘンリエタ退場。暫時の後)

エリザベス、何か云ふ事があるか。

エリザベス いゝえ、別に何も……

バレット 僕は今非常にお前に對して激怒してゐるのぢや。もうお前には用がない。神がお前の心を和げられ、お前が自分の悪かつた事を後悔し、神の御許しを乞ひ——かつ僕の許しを乞ふまでお前には用はない。

(バレット聖書を持つて退場)

(彼が戸を閉めるや否や、エリザベスは立上つて、何か決心した風に呼鈴の紐をひく。暫時の後ウキルソン登場)

エリザベス 戸を閉めて頂戴。(感情にかられて云ふ) ウキルソン、私の友達になつてくれる?

ウキルソン (當惑して) お嬢様のお友達ですつて?

エリザベス え、私の友達によ、今とつてもお友達が要るの、そして何かを手助けして欲しい事があるのよ。

ウキルソン お嬢様、私―私はよく貴女様のおつしやる事が解りません。でも私は貴女様が好きで、ございます―何とかしてお助け致しませう。

エリザベス 助けてくれるつて？ で私、お前を頼つてもいゝと信じていゝの？

ウキルソン はい、本當に左様で御座います。お嬢様。

エリザベス ねえ、ウキルソン、次の土曜日に私、ブラウニングさんと結婚しやうと思ふの。

ウキルソン (喘ぎながら) 御結婚ですつて？

エリザベス 靜かに……え、結婚するの、勿論家の者は誰も知りやしないし、知らしてはいけないの。

ウキルソン おやまあ。お嬢様、それやさうでせうとも。

エリザベス ブラウニングさんと私はマ―アリー・レー・ボン教會で秘かに結婚する事になつてゐるの、一緒に來てくれる？

ウキルソン 私がでございますか、お嬢様、はい、喜んでお伴致します……

エリザベス 結婚してすぐ、私は此處へ二三日の間歸つて來るのよ、そして……

ウキルソン (非常に驚いて) 此處へでございますして、ブラウニング様と御一緒にでございますか。

エリザベス (ヒステリーの様に笑つて) 違ふのよ！ 違ふのよ！ 違ふの、私だけお前と一緒に歸つて來るの。

それから次の土曜日にブラウニングさんと出會つて、外國へ行くのよ……私達はイタリアへ行くのよ、お前一緒に來てくれる？

ウキルソン (小聲で) イタリアへでございますか。

エリザベス え！ さう、お前來てくれる？

ウキルソン でも、お嬢様、さうするより、どうしていゝか解りません。

何も外國の地に執着してゐるといふわけではありません、いゝえ……

でもお嬢様、御主人がついていらつしやらうがいらつしやるまいが、私がお伴致さないでお元氣でイタリアへお着きなさるつて事はありません。

エリザベス ではお前來てくれる？ 一緒に行つてね？ おゝ嬉しい！

ブラウニングさんにそれをお知らせするわ、ね―今あの方に手紙を書くわね。

だからお前この手紙をすぐ郵便函に入れて來ておくれね。

さあ、帽子を着て、支度をしてきてね―用意が出来るまでに手紙を書き終へておくれ。

ウキルソン はい、お嬢様よろしうございます。

(ウキルソン退場。エリザベス、ペンと紙を取つて急しく手紙を書く)

—幕—

第五幕

—逃 避—

第一場

エリザベスはフラツシユの側に跪いて、犬の首に鉛の止具を取り附けてゐる。彼女はぼんやりして、フラツシユの頭を軽く叩き、立ち上つて、テーブルから封筒に入つた手紙の積み重ねてあるものを取り上げ、ざつと目を通し、マントルピース暖爐棚の上に置く。それから身震ひする様な嘆息を洩し、いらくして自分の手を握つたり、放したりしながら窓の方へ歩いて行く。暫らく窓の處に佇んで、再び嘆息してマントルピース暖爐棚の所へ歸つて行き、其の手紙を取り上げて一つづつテーブルの上に置く。彼女の外套、帽子、手袋其の他のものがベッドの上にある。ウキルソンが旅行用毛布を二枚持つて登場。

ウキルソン　まあ！　お嬢様、大變残念な事を致しました。昨日停車場へ荷物を持つて参りました時、餘りあわてゝ此の毛布を入れるのをすっかり忘れて居ました。鞆の中にはまだ澤山入りしましたのに。

エリザベス　そんな事かまはないわ。

ウキルソン (椅子の上に毛布を掛けながら) 本當に、他に何も忘れ物がないといふのですが……
 エリザベス あつたつて大した事ぢやないわ。ブラウニング様は出来るだけ身軽るに、旅行しなくち
 やならないつておつしやつてらしたわ。巴里へ行けば要る物は皆買へるでせう。

ウキルソン まあ！ お嬢様、明日巴里へ行けるなんて、まるで夢の様ですね。

エリザベス 本當にさうね……

(彼女は時計を出して見る)

まあ、何と時間の経つのが遅い事。もう一時間も待たねばならないわ。ウキルソン、馬車屋では、
 何時、何處に馬車を迎へによこすか、はつきり解つて居るんだらうね。

ウキルソン はい、お嬢様、ちよつきり三時半に、ウキンポール街の角に馬車をよこす様、馬車屋の
 若者が書きつけるのを、私、特別注意して見て参りました。ホツグソンさんの圖書館へは十分以上
 はかゝらないと思ひます。それから後はブラウニング様がお世話して下さいと思ひます。

(と云つて、其の聲は低い信頼して居る様な調子)

ねえ、お嬢様、貴女の御主人様が……

エリザベス シツシツ、此處でそんな事云はないでお呉れ。

ウキルソン でも、お嬢様……

エリザベス 私、無茶苦茶に神経過敏になつて居るけど、仕方がないわ。丁度壁が聞耳を立てゝるる
 様な氣がしてたまらないわ。家の中には誰も居ない事は知つて居るのだけど……ハンリエタの外に
 は……そのハンリエタも出かけて居るに違ひないけど。

ウキルソン ハンリエタお嬢様は、私が小路を通つて参りました時に、お帽子を被りかけておらつし
 やいましたわ。

エリザベス あゝ、ウキルソン、一時間も経たない中に此の部屋を出て行つて、二度と此處へは歸つ
 て來れなくなるなんて信じられないわ……

ウキルソン ですから、これが見納めで嬉しうございませうね。お嬢様。

エリザベス さうね……でも……名残り惜しくもあるわ。此處では大變不幸な目にも會ひ、又大變幸
 福な目にも會つた……あゝ、早く時間が來ればいゝのに。こんなに待つて居ると、うんざりしてし
 まふわ。

ウキルソン お嬢様、お手紙お書きになりました？

エリザベス (殆どヒステリックに)

えゝゝ、書いてしまつたわ、私のした事を。又お別れも云つておいたわ。パパへ、何か……何でも
 ……書き加へる事がないかと、丁度今読み返してゐたのよ。でも、何も……何も思ひ出せないわ。

ウキルソン お嬢様、餘りお書きにならない方が却つて悔が少うございますよ。(含み笑して) お嬢様、私、こんな事申し上げていけない事はよく解つてゐるんですが……御主人様がお嬢様のお手紙をお読みになつて、貴女様がもう一週間前に結婚なさいました事をお知りになりましたら、其の晩は大變な事になりませうね。

エリザベス (口早やに) そんな事! ウキルソン、そんな事云はないでお呉れ、思つただけでもぞつとするわ! お父様のお顔が見える様な氣がしてよ……お聲も聞える様だわ。嬉しい、何哩もく遠い處へ逃げて行けて。(時計を見て) もう一時間と二十分。一寸も時間が経たないのかしら?

ウキルソン (間をおいて) ねえ、お嬢様、詩をお作りになつては如何でございますか?

エリザベス (晒然として) 詩だつて?

ウキルソン はい、お嬢様、詩をお作りになつて居らつしやれば、きつと時間が早く経つと存じますわ。(エリザベスは、突然ヒステリックな笑をする。肩掛を掛け、帽子を被つたヘンリエタが登場。彼女は手紙を持つて居る。エリザベス急に笑を止め、びつくりして彼女を見る。ヘンリエタ急いで手紙を二人の方に向ける)

エリザベス お前は——お前はもう行つてしまつたと思つてゐたのに。

ヘンリエタ ウキルソン、私、お姉様とお話がしたいのだけど。

ウキルソン はい、左様でございますか。

(ウキルソン退場)

ヘンリエタ 私出て行かうとした時、丁度入口で使の者に會つたのよ。さうして此の手紙を持つて來たわ。貴女へ。

エリザベス (心配さうに手を差し出しながら) 私に?

ヘンリエタ (手紙を渡さず) え、でもこれはあの——あの方がお書きになつたものよ。

エリザベス クツク大尉が?

ヘンリエタ え、さうなの。

エリザベス 開けて頂戴。

ヘンリエタ (ピリツと封を切つて讀む)

『バレット様、私は、私とヘンリエタさんの事件にもう一度貴女を引き入れて、大變すまないと思つてゐます。併し事柄は大層差し迫つてゐますから、きつと許して下さいと信じます。私の聯隊は急にサマーセットへゆく様に命令が下りました……それで私は行く前に、是非ヘンリエタさんにお會ひし度いのです。ヘンリエタさんへ直接手紙を書けば、きつとお父様に讀まれてしまひます。お父様は、ヘンリエタさんの手紙は皆開封なさると云ふ事を知つて居ます。それですみませんが、何卒

同封の手紙をヘンリエタさんに渡して下さい。感謝せる従順なる僕シモベ、サーテイス・クックより。』
……サマーセット……

(彼女は手紙を下し、同封の手紙を開いて熱心に讀む。エリザベスは手紙を取り上げビリ／＼に裂く)

何時かしら？

エリザベス 二時十五分過ぎ。

ヘンリエタ (低く、きつい聲で) お父様がサーテイスに手紙を書いたり會つたりしないと聖書に誓はねば、家を追ひ出すと私をおどかされた事を、お姉様、覚えていらつしやるでせう。

エリザベス え、覚えてゐるわ。

ヘンリエタ (挑戦する様に) だけど私、今日あの『聖書の誓』を破らうと思つて居るのよ。

エリザベス さうなの？

ヘンリエタ (尙更挑戦的に) え、さうなの……誓を破るつて事に無上の喜を感じるの……サーテイスは、此の水曜日行つてしまふ其の時まで、毎日四時から六時までの間……其の間だけが暇なの……その時間、その居場所は何處だつてお姉様に云はなくつたつていゝわ！ その指定場所に居るつて云つて來てゐるの。月曜日には私達皆此處を引越してしまふでせう？ だから今日か明日かの

中にあの人に會はなくちやならないの。私二日共會ふわ。だから若しお父様が何處に行つてたかつてお聞きになつたら、私出來るだけ心にもない嘘を何度も／＼云ふ積りよ。

エリザベス (靜かに) さうなの？ 何故そんな事を私に云ふの？

ヘンリエタ (挑戦的に) 何故つて、私を不誠實な、誓を破つた、ふしだらな、いけない女だと云つて欲しいんですもの。さうしたら私もお姉様に悪口雑言を浴びせて云ひ返しが出來るからなの。

(急にエリザベスの肩に手を掛け) あ、お姉様、許して頂戴、私此の頃本當の自分ぢやないのよ。私は愛と憎みに燃えて居るの。でもどちらが本當の苦しみか解らないわ……

エリザベス (情熱的な優しさで) まあ、お前は、私には何も解らないと思つて居るのね。あ、でも私には解るのよ。え、解りますとも！ 心から同情してよ、心から可哀相に思つてよ……私は何も貴女の助けになる様な事は出來ない……けれども決して希望を失つてはいけないわよ……決して力を落してはいけない事よ……決して……

(ウキルソンが部屋にとび込んで來る。制しきれない程そわ／＼してゐる)

ウキルソン (喘ぎながら) お、お嬢様……

(二人の姉妹は彼女をぢつと見る。ヘンリエタは驚き、エリザベスは恐れて)

エリザベス ウキルソン！ どうしたの？ (ヘンリエタに) 戸を閉めて。

ウキルソン 御主人様が今いらつしやいますよ……

エリザベス (小聲で) お父様が……

ウキルソン はい、たつた今……御主人様はきつとお聞きになつたのですよ……誰かど云つたに違ひありません……

エリザベス 静かに。

ヘンリエタ (二人の顔を呆氣にとられて交る／＼見て居たが)

だけど、一體全體どうしたのでせうねえ、お姉様?

エリザベス 何でもないわ。何でもないわ。お父様がもう十日も……あの時……貴女も憶へて居るわね。あの時からずつと私に會ひにいらつしやらなかつたと云ふ事だけだわ。あの……人を許すつて云ふ場面は何時もつらいものだからね。

(ウキルソンにきつく)

帽子と外套とをあらへ持つて行つてお呉れ、早く。

(ウキルソンさうする)

ヘンリエタ 私にはそれだけとは思へないわ。あら、お姉様眞蒼よ。ウキルソンはどんな積りだつたのかしら? お姉様。私に何か出来る事あつて?

エリザベス (静かに強く) いゝえ／＼! 云はないで……何も私に聞かないで頂戴……貴女は何も

知らないんだもの……解らないんだわ……何も……何も……

ヘンリエタ でも。

エリザベス (ウキルソンへ) あの毛布を……

(ウキルソン取り上げる。戸を叩く音。ウキルソン喘ぐ。エリザベス低聲で云ふ)

お入り。(咳拂ひをして大きい聲で) お入り。

(バレット登場。彼等皆緊張せる態度にて立つ)

エリザベス (聲をとりもどし) 早くお歸りになりましたね。お父様……

(バレット返事なく、振り向いて三人を見廻はし、煖爐の傍へ行く。ウキルソン明らかに恐怖の色を表はし、毛布を腕に掛けそつと部屋を出る)

バレット(エリザベスに向つて) あの女はどうかしたのかね。

エリザベス ウキルソンですの?

バレット さうだ……さうしてお前も。

エリザベス いゝえ、お父様……何でもありませんのよ。

バレット (暫らく彼女を物思ひに耽つて見詰めた後、ヘンリエタの方に向き)

お前何處へ行つて来たのかね？

ヘンリエタ 別に何處へも。

バレット ぢや、何處へ行く積りなんだ？

ヘンリエタ ヘドレイ伯母さんとお茶の會に行く積りで居りますの。

バレット それは眞實だらうね？

ヘンリエタ ええ。

バレット お前約束を憶えて居るだらうね？

ヘンリエタ ええ。

バレット その約束は守つて居るかね？

ヘンリエタ ええ。

バレット おつと守る積りで居るだらうね？

ヘンリエタ ええ。

バレット (暫らぐ彼女を凝視して) 儂はお前の姉さんに話があるんだ。あつちへ行つてい。

(ヘンリエタ、二人には目もくれずそつと出て行く。エリザベス靜まり返つて待つて居る。バレット窓邊に歩み寄り、ふり返りてエリザベスの方に近づく)

お前はお父さんがどうしてこんなに早く歸つて来たか解るかね？

エリザベス (小聲で) 解りませんわ、お父様。

バレット (低聲で併も力強く) これ以上耐えられないんだよ……お前と別れてから十日にもなるだらう……

エリザベス その事で私をお咎めになつていらつしやるんですか、お父様。

バレット (抑へ切れぬ様な怒り聲で)

お前はまだそんな事を云ふのか、お前もあんな恥かしい事をした妹に味方をしたぢやないか。お前は妹を唆し、助け、辯護したではないか。それなのに、儂がお前に立腹をしないとでも思つたのか。(ぐつとはげしく立ち上つて)

儂はこんな事を云ひに来たんぢやない。只忘れやうと思つて来たんだ。只、只忘れやうと思つて……お前は此の十日の間、儂の半分程も惱んだらうかね？

エリザベス 悩むですつて？ お父様。

バレット 自分が非常に愛して居る者から、むごくも遠ざけられ、それでゐて儂が幸福だと思ふか。儂はお前を許さうとして、此處へやつて来る心を抑へる爲、意志を強くする爲、毎夜どんなに苦しんだか解るか。